ねころけっと

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねころけっと

【Ｎコード】
Ｎ６３８２Ｚ

【作者名】
あひる

【あらすじ】
「世の中全部くだらねぇ病」を患った中学３年の少年。彼の唯一の生きがいは、２匹の捨て猫の世話をすること。人々に忘れ去られた神社でこっそり猫を飼うこと２年。ついに神を名乗る２人の美少女と出会った少年は、ますます現実世界を拒み、神様と猫だけの世界に浸るようになる。
人の世界で幸せになって欲しいと願う２匹の猫の献身と、優しい神様との恋とが、少年を強くしていく物語。はじめは暗め堅めにスタートしますが、徐々に明るくなっていきます。登場人物がほぼ全員

優しい、癒やし系ストーリー。断じて非エロ。

雪白と山姥

１８９６年、明治三陸大津波によって岩手では甚大な被害が出ていた。
人の世で災いが起これば、神の世界も慌しくなる。
日本の神界で中心的役割を持つ中央神道行政府の八戸支局長、光世（かがりよ）、同じく不来方支局長で光世の母、桜前尼（おうぜんに）は震災以降度々京都に呼び出され、結果として被災地の神事行政は混乱していた。

そんな折、下北半島の恐山周辺では子連れの山姥が暴れ出し、多くの家畜が襲われ、分かっているだけでも６人の死者が出ていた。
たまらず八戸支局から、勇猛で知られる新田広門を長とした討伐隊が派遣されたが、つい先ほど、その討伐隊が返り討ちにあい、隊長が戦死したという知らせが届いた。
被害は新田氏だけにとどまらず、隊員２名が負傷、御使い３体死亡という散々な有様で、これ以上の任務には耐えられず、すでに撤退を始めたという。

副局長の馬渡金兵衛は直ちに参与らを集め、対応について話し合ったが、あの新田氏が敗れたとあって動揺は大きく、出てくるのは弱音ばかりであった。
「光世様が帰ってくれれば山姥などは…」
「津軽に援軍を頼むなど有り得ぬし…」
「なぜこんな時に限って暴れだしたのか…」
「不来方は沿岸部の対応で手一杯と聞く。桜前尼様も不在とあれば援軍は出せまいよ…」

ここは我が、と手を挙げる者も無く、このまま光世局長が帰るまで問題を先送りにするしかない、という意見が大勢となって会は閉

じようとしていた。
　しかし、そのようなことになれば無能となじられるのは留守を預かる副局長の馬渡氏である。このまま兵を引くわけには行かず、馬渡氏はやおら立ち上がり、机を叩いて提案した。
「函館には武神と仰がれるホルケウリムセル殿がございます。氏の助力を得て、討伐隊に合力させるべきであります。函館からなら恐山とも近く、早々に問題は片付きましょう」
　この提案には積極的に反対するものも無く、即日馬渡氏は函館に使者を送った。

　函館分支局は、早速にも援軍を出すと約束した。
　その援軍に先立って、道案内のために派遣されたのがキロルカムイ（アイヌ語で道の神）の名を持つ雪白であった。

　雪白はニセコの雪女であったが、慈愛に満ちた性質で、雪山で道に迷った民を度々集落まで帰してやるなど、人と関わるうちにキロルカムイとして信仰されるようになった。
　後にホルケウリムセルの妻となり、上級神の登竜門である神学舎に入学。方術制御に長じ、次世代統治支援システム「アマテラス」の構築に携わり、現在はアマテラス管理部門非常任顧問の職にある。寿命も定年も無く、固着化した神界の人事事情にあって、妖怪からの「神上がり」としては異例の官位持ちまで出世を遂げた才女である。

　普通、神は精神体の状態で日々を過ごすが、特別な理由があって実体化した状態のことを示現（じげん）する，と言う。
　逆に精神体でいることを、解現（けげん）する、と言い、解現している間は現実の物体からの干渉は受けないし、逆に干渉も出来ない。また、宙に浮いて移動することが出来る。

雪白は単身津軽海峡を飛んで渡り、大間崎に入ると、早速土地の調査を始めた。
道案内、と言っても、道路そのものを調べるわけではない。
実際に調査しているのは、地脈、水脈、霊脈の位置と強さ。これらは神や霊体、妖魔などにとって極めて重要な地理的要因となるからだ。

大間から東周りで恐山を迂回して、人々が多く暮らす田名部（現むつ市）の集落に向かう途中、雪白に声をかけて引き止めた少女が居た。
年の頃は１０歳前後。粗末な服を着て、顔も手足も随分と汚れている。伸ばしっぱなしでやや硬そうな黒髪がバサバサと絡んで、いかにもどこにでもいそうな、寒村の子供といった風貌である。

しかし、只者でないことは確かだ。
実体化していない雪白を見ることができるということは、霊的素養の高い人間か、人外の者である。それらは雰囲気ですぐに区別がつくものであるが、どうもこの娘はどちらなのかはっきりしない。
年経た妖怪の変化した姿の様でもあるし、ただの人間の子供の様でもある。
「あなた、この辺の子供かしら？」
優しく訪ねると少女は首を小さく横に振り
「たいそう強く賢き高貴な神様とお見受けします。どうか私の願いを聞いて頂けないでしょうか」
と畏まって答えた。
「どうして私が神様だと思うの？　悪霊かもしれないわ」
「私も昔は神だったのです。だから分かります」
「昔は？」
少し間をおいて少女は答えた。
「今は山姥の子と成り果てました」

雪白は肝を冷やし、辺りを見回した。のんびりとした里山の風景に違和感はなかった。

確かに子連れの山姥と聞いていたし、からかわれているだけというのも考えにくい。この子の言うことが真実ならば、山姥は近くに居るはずである。それにしても、一体何が目的で接触してきたのだろうか。

様々な憶測を心の中で整理しながら、核心に触れていく。

「では、あなたの親は今どこにいるの？」

「私の願いを聞いてくれるのなら、母のところまで案内いたします」

「願いと言うのは？」

「母を打ち倒して欲しいのです」

「どうして？」

「これ以上狂い、罪を犯す姿を見たくないからです」

少女は、台本を音読するように淡々と訴えた。

「そう……」

雪白はあまり戦いを好まないし、武で手柄を上げる必要にも迫られてはいない。しかし、ここで断ればこの子はどうするだろう。引き受けても、本隊が来るまで待っていてくれるだろうか。その間にも山姥は凶行を犯すのではないか。

罠である可能性も充分にあるが、あえて雪白は少女の願いを聞き届けることにした。

神は、アマテラスを通じてそれぞれの階級や所属する神社の格によって神力（しんりき）が支給される。これを天の力といい、地脈や霊脈から神社を通じて受け取る霊力を地の力。民からの信仰を受けて手に入る霊力を人の力といい、その天地人の力の和が、その神の強さに直接影響してくる。

雪白は従七位の官位を授かっていて、充分な神力を供給されており、アイヌからの信仰も受けている。地元の函館を離れている現在は地の力を受け取れないが、それでも並外れた神力を蓄えていおり、方術のエキスパートでもある。

低級妖怪の山姥などに遅れをとるようなことは考えられなかった。

山姥の子

夏の走り。時刻は１７時をとうに過ぎていたが、まだまだ暑さは収まりそうもない。

雪白は足早に進む少女の後を追いながら、不意打ちに備えていた。数歩で渡れるほどの小さな川に差し当たると、少女はそこで足を洗い始めた。幾らか心に余裕が出た雪白は、ようやく気になっていたことを問う機会を得た。

「まだあなたの名前を聞いていなかったですね」

「私も聞いていませんし、教えられません」

元気の無い声だった。

「私は雪白と申します。この服はアイヌの物ですよ。陰陽師に似てはいるけれど、私は名前を知ることで相手を支配するような力はもっていませんから」

「雪白…さま…」

「昔は神だったというのなら、あなたの母親もやはり神だったのですか？」

「そうです」

魔堕ち、ということだった。妖怪が神になることもあれば、神が妖怪になることもある。真の肉体を持たない神や妖魔にとって、穢れというものは極めて重要な意味を持っている。

命を奪うこと、命を食すこと、悪意を受けることで積み重なっていく穢れは、魂を侵食し、精神を蝕む。一方で、穢れは非常に強い霊力をもたらしもする。

今度の山姥は相当な穢れを溜め込んでいる可能性がある、と八戸の使者は言っていたが、その山姥と一緒に行動しているはずのこの

子からは、あまり穢れを感じなかった。かと言って穢れが無いかと言えばそうでも無く、限りなく人間の雰囲気に近い印象であった。
「どうして、あなたは体を持っているの？」
「もうずっと前から、姿が消せなくなりました。母も同じです。穢れが貯まり過ぎるとそうなるのだと思います。」
人間が死後に祀られ一旦神となり、その後に魔に堕ちると、実体を持った妖怪になりやすい。この少女の話にはそれなりに信憑性があった。
だとすれば、母を討って欲しいという願いも、偽り無い本心なのだろうか――
雪白の心は揺れていた。
例え少女が嘘をついていたとしても、罠だとしても、山姥は滅ぼさなくてはならない。では、その時この子はどうすればよいのか。やはり、滅ぼさなければならないのだろうか、と。

「結局、私ももう、妖怪なのだと思います」
少女は石に座り背中を丸め、足元をじっと見つめながら、益々元気の無い声で呟いた。
長い時間悩み抜いてきた様子に見えたが、それも演技であるかもしれない。
この悔いが本心であって欲しい。救いのある結末を願い、雪白は励ましの言葉をかけた。
「でもあなたからは、あまり強い穢れは感じません。これから浄化していけば、必ず神に戻れるでしょう」
そう言われても少女の顔は冴えない。
「浄化ができれば、犯してきた罪は問われないのでしょうか？」
その質問はあまりに重く、雪白は答えられなかった。
空気の悪さを察してか、少女はすっくと立ち上がって、行きましょう、と少しはにかんで見せた。

川の向こうは広葉樹がまばらに伸びる、明るい林であった。木漏れ日も多く、こんな状況でなければ心地よい緑の雲の中を散歩している心地だったのであろう。
川から離れると、間もなく風向きが変わった。

風に混ざっている瘴気。そして血の臭い。とっさに雪白は風下へ飛びのき身を隠す。
少女はその場に立ち尽くしたまま、何か考え事をしているようだった。
じわり、じわり、臭いは強くなっていく。

数分後、西に向かう獣道から山姥が姿を現した。
ゴワゴワの白髪は天を衝き、その目は闇に染まり、もはやどこを見ているのかも分からない。赤茶けた肌に深く刻まれた皺は、旱魃にひび割れた田の泥のようである。
その腕にはだらしなく四肢をぶらつかせた、小さな体が抱えられている。
動物などではない。明らかに人間の子供の死体であった。
山姥はその死体を少女の前にひょいっと放り出して衣服を剥ぎ取ると、ニタリと笑った。
「いい子だったよ。最高の食事だよ。今日はいっぱい頑張ってきたんだぁ。これならおまえも食べたくなるよ」
仰向けに倒れた4～5歳の女の子の生気のない肌に鋭い爪を突き立てて、ニタリニタリと笑う。
「ここが一番栄養があるんだよ。おまえが食べるんだよ。一番良い所だから」
暗赤色の血が滴る、黒い塊を掴み取って、少女の眼前に捧げる山姥。
「贅沢ばかり言っていてはいけないよ。ずっと食欲が無かっただろう。心配なんだよ。さあさあ、今日のは本当に良い所だから」

「もういいよ。もういいんだよ。母上。もう私は何も要らないから」
少女は搾り出すようにつぶやいて、臓物を受け取ると、幼い少女の腹の中にそっと戻した。
そして涙をこらえ叫ぶ。
「雪白様。御覧になったでしょう。これが私達です。お願いします。母を止めてください。私にはもう耐えられないッ！」

笹薮の影からスッと音も無く現れた雪白は、先ほどから練っていた方術陣を解き放つ。
タケノコのように地面から飛び出してきた無数の氷柱は碧く光りながら3人の周りをズラリと取り囲み、それぞれが甲高い羽音のような唸りをあげる。４mもの高さを持った柱と柱の間には透明な壁が張り巡らされ、氷の柵牢がたちまちに組みあがった。

事の次第を悟って、山姥は奇声を発し、地面に頭を打ち付けた。
「なして！　なしてだ！　こんなに大切に育ててきた我が子がっ！」
嘆きはすぐに怒りへと変わる。
「裏切った！親を捨てた！私はまた一人になったんだ！」
血に汚れた手で、覆い被さるように少女に掴みかかる山姥の足をドングリ大の雹が撃ち抜く。
「下がっていなさい。ここから先は私の業（ごう）です」
少女に退去を促し、氷の結界の内壁を滑るようにすばやく移動しながら隙を窺う。

出来ることなら結界の中に少女を入れたくは無かったが、その機会を逸してしまい、どうしても少女を巻き込まぬよう、位置取りを気にしながらの戦いになってしまう。
小さな攻撃を繋げるより、隙を見て一撃で決めたい、その判断が

雪白を守勢に回らせた。
先ほどの雹による攻撃はほとんどダメージを与えられず、傷は瞬く間に癒えていた。

やはり、大きな術が必要と感じて距離を取る雪白だったが、妙な息苦しさに気付いた。
山姥の放つ瘴気が結界の中に充満し始めていたのだ。この瘴気に触れ続ければ、魂が穢れてしまう。やむを得ず雪白は穢れへの抵抗を高める為に示現して戦わねばならなくなった。

実体化すれば、受ける穢れの影響を軽減できる反面、空を浮遊することが出来ず、機動力が大きく殺がれてしまう。また、結界によって土俵が限られている以上、自然と近距離での肉弾戦が主となっていく。

雪白は方術こそ得意だが、体術は苦手としており、山姥の猛攻に劣勢になっていた。もはや大きな術を練る余裕などはなく、氷のつぶてを飛ばしつつ逃げ回るような状態が続いた。
少女は不気味な沈黙を保ったまま、どちらの援護もする気配はなかった。

いかに季節に恵まれないとは言え、山姥の如き妖魔に官位持ちの自分がここまで追い詰められるとは本人も想定していなかった。相手を甘く見ていたことを後悔しつつ、状況の打開を探る。
山姥の一撃一撃は強力であるが、動きの連携は良くないように思えた。夫のホルケウならその隙を付く武勇を持っているが、雪白には無い。やはり方術を上手く使わなければ勝機がつかめないのだと分かってはいるが、この敵はそのための余裕を与えてはくれなかった。

気付けば結界の氷柱は随分と解けてきて、もう長くはなさそうである。早く決着をつけないと取り逃がすかもしれない。見失うことになればまた人が、子供が殺されるのだろう。

意を決した雪白は自分の周りに氷を張り巡らし、自ら氷漬けとなって防御を固めた。

「亀にでもなった気かい？そんなものすぐ壊れるよ」

山姥は力いっぱいに氷像と化した雪白に殴り掛かる。

一撃、二撃、三撃、四撃目には氷の鎧にひびが広がる。

これが雪白の時間稼ぎであることを、山姥は見抜けなかった。

「ふん。もう終わりだよ。おまえの魂を食えば私はもっと強くなる。そうしたら頼朝ごときの結界、打ち破ってやるのさ」

2歩、3歩退いて、助走をつけて全力で雪白を打ち砕こうとする山姥の背中に激痛が走った。

振り返ると山姥の子は、物憂げに立ち尽くし、その様子を見ていた。

「！？　まさかおまえが？」

「いいえ。その子は何もしていません」

そう言って氷の鎧を脱いだ雪白が右手を突き出し、手のひらを閉じる。

一番最初に張り巡らした氷の結界。その無数の柱が次々と山姥に襲い掛かる。

懸命に2本3本と叩き落しはするが、それが限界であった。死角を突いて時間差で降り注ぐ槍の雨になすすべも無く撃ち貫かれていく。

もがいてもがいて、また立ち上がっては氷の槍に貫かれ、ついに山姥はどうっと倒れこみ、もはや雪白を睨みつける余力も無いように見えた。

それでも雪白は用心を怠らない。

弱った振りをして油断を誘うのは、妖魔の常套手段である。

少し距離を置いて、新たな結界の方術を練り上げていた時、突如雪白の視界が黄昏色に染まった。

人一人分の小ささながらも、密度の高い強力な結界であった。

ハッとして振り返ると、そこには振り乱した髪もそのままに、気迫に満ちた視線を送る少女の顔があった。目の前で母が傷つき敗れる様にも動じる気配が無い。

雪白はゾクリとした。

（まさかこの子は…山姥の本体は…）

山姥の子（後書き）

怖い描写はここだけです。以後はありません。

母の愛、子の願い

少女は物も言わずツカツカと大樹の根元に歩み寄ると、膝をたたんで両手を地面に置いた。
そして何かを掴むような仕草をした後、ゆっくりと膝を伸ばす。
その両手には黒い諸刃の直刀が握られていた。まるで元よりそこに突き刺さって居たものを引き抜いたようにも見えたが、自らの力で土と砂鉄から造り出したものだ。
少女はその刀を自らの両足に向けて強く突き刺した。
ドンっと鈍く、くぐもった音が森に染み込んで、少女は大地に縫い刺された。
苦痛の息すらも漏らさず、次いで木々に絡みつく蔦を引き寄せて、その細い首に巻きつかせる。蔦は首だけではなく、その四肢をも縛り上げていく。

雪白は嫌な予感に震えていた。
古来より、自らを傷つけ、その苦痛を力に転化して術に上乗せする呪術が存在する。この子は私を屠る為に、力を練っている。私が力を出し尽くし疲れるまで、静に待っていたのではないか。人を騙し、罠に陥れるのが妖魔というものなのだから。
そう思えて仕方が無かった。

まずはこの結界を破らなくてはならない。密かに結界の術式を探っていると、ようやく少女が重い口を開いた。
「雪白様…」
搾り出した声には、隠し切れない苦悶が感じ取れた。
「雪白様。最後のお願いが…御座います」
相変わらずその眼には底知れぬ力と強い意志が感じられたが、その声に敵意はないようだった。

「私はこれから正真正銘の化け物となります。そうなりましたらどうか、私を滅ぼしてください。どうか、お願いいたします」
その意図を量りかねていると、痛々しくも、少女は笑って見せた。
そしてこの森の全てをその胸に収めんがほどに空気を吸い、詠い始めた。
『高天の原に　神留まります　皇が睦　神漏岐・神漏美の命以ちて
八百万の神等を　神集へに集へ給ひ…』
唐突に始まった大祓詞（おおはらいど）に雪白はここでようやく少女の真意を得た。
この子は私を罠に嵌めるものではなく、かといって母を裏切るものでもなく、ただ母の穢れを我が身に移し、元の姿に戻してやるための時を待っていたのだ。
狂気に呑まれた母はきっと祝詞に強烈な拒絶を示すだろう。だから身動きも出来ぬまでに衰弱する時を、待っていたのだ。その時を得る為に、私を母の元に連れて来たのだ。そして、全ての穢れを背負って一人、死んでいこうとしているのだ。
全ては、母を救いたいが為に――

だが現実はそう容易くは無い。
穢れを祓うということが、どれだけ難しいことであるのかをこの少女は知らないのだ。
なぜゆえに、世に妖魔がはびこるのか。因果というものの重さは実に烈（はげ）しい。
最高位の神ですらこの山姥の負った穢れの1割も祓えるかどうか。
まして、なんの訓練も受けていない、無官無格の幼子が、いかに一言一句過たずに大祓詞を奏したところで、髪の毛一本ほどの穢れも浄化出来はしない。

少女の母への想いとその覚悟、そして哀れなまでの無力さが雪白の胸を締め付ける。

せめて最後まで見届けてあげようと、深い敬意を目頭に溜めて、少女の祝詞に耳を預けた。

粛々と、流れるように、少女は祝詞を詠いきった。

一体どこで覚えてきたのか。その健気さが雪白の心に突き刺さる。

どんなに想っていても、どんなに正しく詠えても、何も変えることはできない。

変えることはできない。そのはずだった。

次の瞬間、雪白は我が目を疑った。

少女の目交いに、灰色にくすんだ太陽のごとき方術陣が鈍く輝き、風車のようにくるくると回り始めたのだ。よくよく見れば剣九曜の神紋である。

変わるはずの無い現実が、変わろうとしていた。

「母上。ずっとそばで愛してくれてありがとう御座いました。私は元より生を受けぬ者ゆえ、居るべき場所へ戻りたく思います。いつか、いつか、母上が父上と共に安らげる日々を過ごされますよう。兄上とともに少し遠くより、願っております」

少女がそう語りかけると、山姥の体から立ち込める瘴気がズイと銀色の太陽に引き寄せられていく。

疲れ果て、うずくまったままの山姥から、モロモロと濃い紫の『わだかまり』が引きはがされては少女にこびりついて行く。その様子に雪白は声をひしゃげて叫んだ。

「やめなさい！それはあなたが背負うべき業ではありません。もう、やめなさい」

身にまとった罪悪の外套が軽くなったからか、山姥は少し体を起こして辺りを見回した。

すかさず雪白があらん限りの大声で訴える。

「聞こえますか？私の話が聞こえますか――」

声を張り上げ、何度も語りかけるうちに、
山姥はどこかぼんやりとしながらも、雪白を正面に見すえた。まさに憑き物が落ちたというべきか、それはもう、先ほどまでの憎悪に満ちた表情ではなかった。
白く逆立っていた髪の毛も、幾分黒さを取り戻し、乾いた赤土の如き肌も、人の物と判るまでに戻ってきている。
だがそれは、それだけの穢れがすでに少女に受け渡されたということでもあった。

「残念ながら、あなたは罪人です。如何な事情があったかは存じませんが、あまりに多くの罪を作り、その報いを受けなければなりません。しかし、今、あなたの子がその業を肩代わりしようとしているのです。わかりますか？」
「ええ、覚えております。私は、私は…なんと罪深いことを…」
足元の土をかきむしりながら、山姥はうろたえるばかりであった。
「親の罪を子が購うことを、あなたは良しとするのですか？このままわが子が魔に堕ちていくのを黙って見ているのですか？」
「嫌です！私はもう、子を失いたくはありません」
山姥は涙声で力強く答えた。
「ならばお守りください。あの子を救えるのはあなただけなのです」
「一体、どうすれば…」

「あの方術は祝詞に込められた言の葉によって編まれた物です。あなたの、子を思う気持ちを言霊に託して祝詞返しをすれば、あとは心の強さのせめぎ合いとなるでしょう。相手を思う気持ちの強いほうが、穢れを引きよせることになります」
「そう…」
「そうですね。私は強くなければならない、それであの子を救えるのならば。私は今一度鬼と身を落しましょう」

そう言って、山姥はわが子と向きあい、言葉を紡いでいった。

「舞宵（まよい）。私は愚かな母でした。そして力なき母でした。あなたの兄もみすみす奪われて殺されて。そして今度はあなたを生きて産み落とすこともできなかった」

少女はブンブンと頭を振って否定する。

山姥は続けた。

「せっかく皆が私達を悼み、神として祀ってくれていたのに、それを捨ててこんなところで鬼と成り果てて。どれだけあなたにつらい思いをさせてきたのでしょう。それを分かっていながらも、ただ愛しいあの人の元へ参りたいという弱き女の一念にて、押しとどまることができなかった」

「母上はずうっと優しかった。弱くなかった。それに、私だって父上に会いたかった。だから…何も…」

「そう。私はあの人を想い続けた。そして舞宵。あなたのことも愛し続けた。でも、やはり私は道を誤ってしまったの。愛し方を間違ってしまった。そしてその罪は私が背負うべきものなのです。子に背負わせてしまっては、私は母を名乗る資格を無くしてしまう」

少女も食い下がる。

「だって、私のせいだから。私を育てる為に、母上はいつも必死で一生懸命で。その為にやったことだから。私は見てたから。ずっと、分かってた。私が居なければ、母上が盗んだり殺したりはしなかった。それなのに私は何もできなかった。止めることも。消え去ることも。もう大丈夫だから。私はもう、充分幸せだったから。だから、最後に恩返しをさせて…」

油蝉の騒々しい声は消え、ヒグラシの声が響く。

一匹が鳴けば、十匹が答える。いつの間にか、風は涼しさを帯び始めていた。

「舞宵。あなたは間違っているわ。いい？」

一息ついて、姿勢を正して続ける。

「あなたはまだ幸せになんてなっていません。親の元で得られる幸福など、たかが知れているものです。大人になって、私の元から離れて、それで一人前の幸せと創ってゆけるのですよ。」

「そして、親に恩を返すというのなら、その行いは親にではなく、いつかあなたが母となった時、その子に返していくべきものです。私も、私の祖先も皆、そうして命をつないできたのです。それを勘違いしてはなりません」

ぴたりと、瘴気の流れが止まった。平静を取り戻した母と、心を乱した娘。もはや勝敗は決していた。

「嫌だっ！私はもう、母上が汚れていくのを見たくない！」

論を捨て、駄々をこねる少女に、母はうれしそうに声を和らげる。

「私はもう汚れたりはしないわ。今ね、強くなったから。もう自分に負けたりはしない。だから、さあ」

山姥は手を方術陣に差し伸べ触れようとする。穢れがズズ…と母に戻っていく。

「駄目だ！戻っては嫌だ。私が。持って行くからっ！」

「信じなさい。あなたの母を。そして良く見ておきなさい。愛する人にはね、こうやって手を伸ばして触れたいと願うの。愛とは掴み取るものだから」

方術陣に手を突っ込み、さらにその向こうのわが子へと手を伸ばす。

肉が爛れ腐るような臭いが煙る。わずかに漏れる苦痛の溜息をこらえつつ、母はまた一歩前に進む。
その迫力に、少女はもう言葉が出ない。
「私は諦めたりはしない。必ず立ち上がって、どんな結界も乗り越えて、あの人に会いに行くわ。そして私が舞宵の母ですって胸を張って言うの。そのためにね、舞宵」
伸ばした手が愛娘の髪に届く。
「これからもずっと、あなたの母親でいさせて」
母の髪はまたも白く乱れていた。ひび割れたレンガの如き頬をわずかに膨らませて、山姥は微笑んでいた。
堂々と、笑っていた。

静なる舞い

山姥の心は、負けなかったのだ。切れ上がった鋭い目にも、闇の中に母性の炎はまだ灯っていた。
少女の足を貫いていた剣を引き抜いて、体に巻きついた蔦を丁寧に外すと、歯を食いしばり涙を受け止める幼い頬を優しくさすった。
両足の甲の傷が癒えるのを見届けると、ぎゅっと抱きしめて、もう大丈夫、と囁いた。

すうっと赤銅色の結界は消え、ヒグラシは一層に唸りをあげる。もう木漏れ日は差さなくなっていた。
もう一度娘の髪を撫でると、山姥は踵を返し、雪白と向き合う。そしてしわがれた声で言った。
「私は、おまえを倒さねばならなくなったよ。死ぬ訳には行かなくなったよ。そう約束したんだぁ」
雪白もまた、躊躇無く前に出る。
「あなたにはまだ、私を信じる心は残っていますか？」

唐突な質問に山姥は面食らった様子であったが、静かに答えた。
「信じるよ。おまえは恩人だ。それは忘れてないよ。でも駄目だ。私は行かねばならねんだぁ」
山姥も一歩前に出る。
「もう少し、待ってみてはいかがですか。その子がもっと強くなるまでの間」
「！？」
「…」
「待ったら、どうなる？」
「その前に、なぜあの子はあんなに穢れに強く、浄化の力を持つのか、教えて頂けませんか？」

「分からないことを聞かれても、分からねぇんだよ」
「そうですか…」
「でも、あの子が特別な力を持っているのは確かです。もっと強くなり、地位ある神として活躍するまでに至れば、あなたの穢れも祓えるほどになるやもしれません。あなただって、あるべき姿であの方に会いたいでしょう？」

「私はもうたくさん待ったよ」

「ええ。分かります。あなたが誰なのかも。誰に会いたいのかも。分かりました。そしてあなたの強さも。子への想いも」
「よくぞ心を取り戻されましたね。同じ女として、その一途な愛情に敬服いたします。私も、かくありたいと願います」

「私を分かったって、何になるんだぁ？」

「申し遅れました」
すうっと一息ついて続ける。
「私の名は雪白。寂しき雪の民の眷属にして従七位を預かるアイヌの神。私はあなたの想いを引き継いで、あの子の母になりたく存じます。必ずや立派な神に育てて見せます。ですから…。母君は暫し、お休みになられてはいかがでしょう」

「私に、母親を辞めろっていうのか！」
山姥は声を荒げた。

「あなたは先ほど言いました。親元を離れて、一人前になってこそ幸せになれると。今がその時ではありませんか？」

「待ってください。雪白様は母をどうなさるのですか？」

少女は懇願するような眼で二人を見つめながら駆け寄り、叫んだ。
「封印します。このまま放っては置けば、いつ正気を無くすかも分かりません。それに、私が見逃したところで、間もなくやってくる私の夫に滅ぼされるだけでしょう。あなたが強くなって、母を救える日が来るまで、眠りについてもらうしか…生かす道はありません」
それを聞いて、山姥は少しうなだれて言った。
「そうか。そういうことか。それは分かった。分かるよ。でも、私は自分の力で生きたいよ。自分の力で守りたいよ」
「いいえ、母上。私にやらせてください。私を信じてください。そしていつか一人前になった私と共に、父上の元に参りましょう。それならば、私には明日を生きる希望が湧いて来るのです。お願いします」
娘には分かっていた。もはや封印と滅びの二択しかないと言うことを。即ち、選ぶ道は一つしかないのだと。
山姥はどっかりとその場に胡坐をかいて座り、あっさりと首を縦に振った。
そして笑った。
「そうか、そうか。ならばいいさ」
妙な物分りのよさに、雪白は少し不安になった。
「初めてだったかもしれないねぇ。だって何も言わない子だったもの。人のやることに良いとか嫌だとは言うけんとも、こんな事を言うのは、初めてだったかもしんないねぇ」
「信じていただけますか？」
雪白は真剣な目で山姥の真意を探ろうと手足の先まで凝視した。
「雪白様は大した神様だぁ。良ぉく分かったよ。私が潰してしまっ

た花を、おめ様は咲かせて見せたんだぁ。間違いはながんべもの」
山姥はすっかり覚悟を決めたようだった。
「一つだけ我がまま聞いてくだんせ。この子に綺麗な着物を、一つでいいから着せてやってくだんせ。私、ずっとそれが、情けなかったんだぁ」

何も言わず、雪白は少女の肩を引き寄せると、藍色の紐を取り出し、ボサボサの黒髪を結い上げた。
そして両肩に手を乗せて、何かを念じた。
すると、少女の着ていた粗末な麻の服はたちまちに見事な着物へと変化していった。
白地に紫のリンドウをあしらった浴衣に、上下の縁に銀のラインの入った淡い紺の帯。
「きれいだねぇ…」
山姥は感嘆の唸りを漏らした。
「この子はまだこれからです。これからもっと。美しくなりますよ」
そう言われると、どうにもくすぐったくて、少女は細い肩をますますすぼめて、頬を赤くした。
「これは神通力で作ったものですから、すぐに元に戻ってしまいますが、必ずこれに負けない本物の着物を着させましょう」
「ああ、頼んだよ。楽しみに待っているよ」
「最後に――。この子の名はマヨイ、でよろしいですね」
「そっか。さっきは言葉に力を入れねばなんねくて、言ってしまったったんだなぁ。踊る舞に夜の宵。それでマヨイだぁ。あなた様は舞宵の親になってけるずがら、教えてやらねばなぁ」
「この子の名が舞宵であることは、他に誰か知っていますか？」
「ねぇはずだぁ。今まで誰にも教えたことはねぇし、この子にも人に教えてはならねぇと言ってある。本当の父親に教える前に、他の物の耳に入れたくはねがったもんなぁ」
「そう。良かった。あなたの子のふさわしい、素敵な名ですから。

その名を奪わずに済んで、本当に良かった」
「欲を言えば、もっと早くに雪白様に会いてがったよ。欲たがり（よくばり）でば、わがんねぇ（いけない）ことだけんどもな」

すっと、暗くなり始めた空を見上げ暫し沈黙する。木々の枝葉が微かに揺れて、ヒグラシの声も少なくなっていた。
そうして間もなく、山姥は小指の先ほどの黒い礫（つぶて）となって、いつ覚めるとも知れぬ眠りについた。

しずしずと　歩みし宵の　幾つなる　いかなる月そ　まへゆきてみる

（身を隠しながら一体どれだけの夜を過ごしてきたことでしょう。それでも希望の明かりを求めて前へ進んできました。ずっと物も言わず私の後を付いて来た舞宵も、いつまでも幼くはないのですね。私はもう見ることは出来ないけれど新しい母と共に、どんな月をながめるのでしょうか）

いつか来た道

雪白は舞宵を田名部に残し、函館に戻ると、出撃の準備を進めていた夫に山姥親子の討伐が済んでしまった事、これから本州の被災地を行脚する為しばらく帰らない旨を伝えると、祝宴も辞して再び一人、田名部に戻った。

舞宵は自分を見捨てず戻ってきてくれた事に安堵したが、なぜ一緒に函館に行かなかったのか、いぶかしく思い、聞いてみた。

雪白は、申し訳なさそうに

「その前に訪ねておきたい人が陸中の国の遠野という場所に居るのです」

と答えた。

「遠野ですか？」

「ええ。ここからは百里も離れているけど、もう少し我慢してね」

「ああ、それと――」

雪白は右手の人差し指で宙に何かの印を書き込んだ。

すると、簡素な四角い方術陣が現れ、その中に手を突っ込んでゴソゴソと何かをまさぐり始めた。

神は解現している間、現実の物体を持ち上げる事が出来ない。力を使って動かす事は出来るが、効率的ではない。その為、鞄の役割を果たす術を用いて、物を持ち運ぶのだ。

「中が見えないのが困るのよね～。ん～。これよね？」

ズルリと方術陣から引っ張り出したのは、白い衣である。これを舞宵に持たせて、またさらに何かをまさぐる。

「絶対に入ってるはずなんだけど～。も～小さいと大変なのよね～」

急におばさん口調になって、方術陣の中を無造作にかき回す雪白を見て、ああ、見た目ほどキッチリしっかりしている人じゃないの

だな、と舞宵は少し残念に思った。
「あっ、捕まえた！　こんなとこに居たのね～」
得意気に取り出した若草色の細い帯を、舞宵が抱える白い着物の上に乗せると
「はいっ。じゃあ、着替えましょうか」
と、胸の前で一拍叩いて嬉しそうに言った。
「私に、ですか？」
「とりあえず、です。とりあえず。お母様との約束はもう少し待っていくださいね」
麻とも違う木の皮が密に編み込まれた、白い布地はずっしりと重く、広げてみれば襟、袖、裾には赤い渦巻きのような刺繍が施された、上等なアイヌの着物だ。

「本当に、私に、ですか？」
もう何十年と、農民漁民の子から剥いだ、粗末な物しか着ていなかった舞宵にとって、この新品と思しき上等な着物はあまりにもったいなく感じられて、なかなか袖を通す気にはなれなかった。
「はいっ。早くしないと私が脱がしちゃうぞ～」
また、胸の前でぽんっと手を合わせる。
冗談のような口ぶりだが、そこからすばやく舞宵の両肩に手を伸ばす動作には、一切の無駄が無かった。
「いえっ、自分で、自分で着られますから！」
雪白の本気を感じ取った舞宵は、着物と帯をぎゅっと抱え込み、虎に追われるウサギの如く茂みの中に駆け込んだ。

暫くして、おずおずと姿を現した舞宵は、まさしくアイヌの子となっていた。
「う～ん。少し、大きかったですね」
手のひらが袖の中に納まってしまっているのを見て、雪白が眉間に皺を寄せる。

「そ、そうでしょうか」
両腕をパタパタと羽ばたかせ、自分の姿を見回す無邪気な舞宵の一面を目の当たりにして、こんなに小さな体で、母の全てを受け止めようとしていたのだと、改めて哀れに思った。　と同時に、あれほど気高く慈悲深い賢人ですら、かくも穢れ、堕ちてしまうのだという事実に肝が震えた。

「いい？私達は旅するアイヌの親子。山姥の子であることは絶対に知られてはなりません。遠野に着くまでは、リムセ、と名乗ってください」
「リムセ、ですか？」
「踊る、という意味です。あくまで仮の名ですよ。舞宵という素晴らしい名を奪うことは、絶対にしたくありませんから」

舞宵は未だ相当の穢れを残している為、精神体に戻ることが出来ず、道中は徒歩での移動となった。
吹越烏帽子の麓で待機していた八戸支局の討伐隊には挨拶だけをし、「光世様には改めて夫が使者を送るから」、と伝え、他の神の目を避けながら、早々に南を目指した。

八戸を過ぎた辺りから、津波による被害は大きくなり、行く先々で凄惨な光景を目にした。泥にまみれ、飢餓に苦しむ民の中にあって、身なりの良い二人は特に目立ち、物乞いがこぞって雪白に殺到した。
しかし、雪白は民に施せるような物は持っておらず、ただ手を合わせながら民の切実な願いを振り切るしかなかった。

舞宵は、さぞ雪白が心苦しい思いをしているだろうと思い、「子供の自分だけなら物乞いも寄っては来ないから、雪白様は姿を消してください」と何度か進言したが、雪白はこれも修行の内だから、

と言って聞かなかった。

人ならぬ者の強みにて、田名部を出てから六日後には宮古に到達していた。

ここからは海から離れ、閉伊川に沿って西に進み、川井の村よりは南に曲がり、小国川の流れを横目に立丸峠を越えて遠野へ入る予定であったが、川井まで来ると、舞宵は寄りたい場所があると告げた。

遠野へ抜ける街道の入り口から、西に行き過ぎること一里半。閉伊川が鈴久名川を分けてすぐ上流の松林の中の小道を行くと険しい岩盤質の丘の頂上に、古びた神社が立っていた。

祠、とも言うべき小さな社の社名の書かれている梁にそっと手をかけて、舞宵はどこか申し訳なさそうに言った。

「ここが、私達の祀られていた社です」

決して立派ではないながらも、手入れはされており、二人の居ない間も別当らは信仰をよせ、守ってきたのだろう。

「私も、よく覚えてはいないのですが、どんな所でどう過ごしたのか、母から聞かされていたのです。思ったより分かりやすいところにあったんですね」

「あなたは、ここに戻りたいの？」

フルフルと頭を振って、いいえと笑った。

「ただ、目に焼き付けておきたかっただけです。ではもう、行きましょう」

余韻に浸ることもせず、さっさと急な坂を駆け降りる後姿に、雪白の心境は複雑なものだった。

予定の道筋に戻り、二里ばかり進んだところで、雪白は今日はここで夜明けを待とうと言い出した。日はまだ高く、まだ先へ進めそ

うであったが、この先は山深く、峠を越えるには早池峰神社のあたりで夜を明かすことになってしまう。他の神との接触を避けながらの道中であった為、手前の江繋という数軒ばかりの集落の外れに野宿をすることにした。

下弦の月が浮かぶ草原で、火も焚かず並んで座る二人。

雪白がこんな山奥の先の神社のことまで知っていることに驚いた舞宵は、ポツリと口を開いた。

「もしや雪白様は日本中の地理をご存知なのですか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。行ったことがある場所だけです」

「では、この辺りも来たことがあるということですか？」

「ええ。この先の遠野には、かつて共に学んだ友人がいるのです。あなたも名前は聞いたことがあると思いますよ」

「そういったことには疎いのです」

「巴、という女の人です。巴御前といえば分かるかしら。お母様から聞いたことはありませんか？」

「なっ…！あの巴御前がですか？一体なぜこの地に？」

「それは美しくて賢くて強い人ですもの。破格の待遇で声が掛かったんですって」

「ということは、その巴様に会うために遠野へ？」

「ごめんなさいね。今まで黙っていて」

暫く黙った後、舞宵の方を向き、正座してスッと頭を垂れた。

「私は、巴にあなたを預けようと思っているのです」

舞宵は何も言わず、表情も変えなかった。

「あなたの母になりたいと言っておきながら、薄情だと感じるかもしれません。ですが、それなりの考えあっての事――」

雪白は、第一に舞宵が山姥の子であることを隠す必要があること。第二に函館では父の封じられている津軽海峡が近すぎる点。第三に

遠野界隈は穢れを祓う浄化の神、瀬織津姫命の信仰が篤く、舞宵自身の浄化に有利なこと。第四に遠野支部長の愛世は物事に無頓着で何かと都合がよい点、そして何より、親友の巴が信用できる人物であることを説明した。

舞宵にはもとより雪白の意向に口を差し挟む気などは無く、ただ淡々と、分かりましたと頷くばかりであった。それが、雪白にはとても寂しかった。

「それでも、私はあなたの母親になることを諦めるつもりはありません。浄化が済んだなら、あなたを正式に養子にして、神学舎に入学させます。約束は必ず果たして見せます。入学式には誰より綺麗な服を用意するわ。そして、あなたが立派な神になれるように支えます。必ず」

「どうして、雪白様は出会ったばかりの私などの為にそのような約束をなさるのですか？私には何も返せるものなどないのに」

「仕方ないわ。だってもう知ってしまったもの。あなたのお母様の想いも。あなたの本当の願いも。そしてあなたに秘められた可能性も。ね」

「私に、可能性？」

「少なくとも、穢れへの抵抗力と、浄化の術式の適正はちょっと常識では考えられないくらいの素質があるわ。でも…これは隠していたほうが良いと思うの。知られれば絶対にろくなことにならないから」

「私には、そう言われても良く分かりません…。このくらい、普通ではないのですか？」

「普通じゃないわ。とにかく、人前で浄化の力は使わないで。約束できる？」

「はい」

「もう一つ、あなたの可能性」

「え？」
「あなたはこれからたくさんの人に愛されるわ。間違いなく」
「まさか…」
「今日は手をつないで寝ましょうね。もう明日には遠野に着くわ。そうすればもう、暫く会えなくなるかも知れないから」

草丈の短い広大な寝床に二人は寝転がり、手を繋いだ。
何十年ぶりかで感じる柔らかく暖かい手の感触に、舞宵は母の事を思い出していた。
「少し、思い出しました」
「どんなこと？」
「母は、気が強くて。一度決断すればじっとしていられない、せっかちな人でした。」
「そう？　慎ましくて穏やかそうに見えたけど」
「母が最初に盗みを働いたのは、私に服を着せる為でした。姿を消せなくなって、服も戻らなくなって。寒くて、恥ずかしくて、私は泣いていたんです。泣いていれば母が、何とかしてくれるだろうと、甘えていたのだと思います。あの時、どうして私は泣いてしまったんだろう。手を繋げば、こんなに暖かくって、きっと寒くなんて無かった。きっと我慢できたはずなのに。そうすれば母上だって――」

たまらず雪白は力いっぱいに舞宵を抱きしめた。
どんなに言葉を尽くしても、舞宵はその悔いをずっと背負っていくことになるのだろう。
「すいません。私、また泣いてる。泣いちゃいけないのに。強くならなきゃいけないのに」
「大丈夫。女は泣きながら強くなるものよ。だから、大丈夫」
寝る間も惜しんで歩き続けた、一週間の最後の夜に、二人は互いの心が呼び合う声を聞いた気がした。

遠野の豪腕

翌日は朝から雨が降った。まばらながらも大粒の雨は霧を纏い、女二人、景色も分からぬままにただ目の前に続く細道を進む。
昼には峠を越えたが、雨脚は強まるばかりであった。
昨夜のことが幻であったかのように、二人は一言も交わさず、黙々と先を急いだ。

夕刻の前に二人は目的の松崎八幡神社に辿り着いた。長旅、と言うほどではないが、道行く足の重い一週間が、ひとまず終わった。

境内へ続く門の前にはやや背の高い、赤みがかった髪を一つに結い上げた二十歳くらいの女が立っていた。
武人の気配を漂わせる強面の女は無愛想に楓、と名乗り、雪白らを支部本舎に案内した。
幾つかの社が集まる敷地を通り抜け、藪に埋もれつつある鳥居をくぐると、そこには別世界が広がっていた。

細やかな装飾が施された巨大な石の柱が、何を支えるでもなく8本鎮座し、その向こうには石造りの四角い建物。褐色の重厚な扉の持ち手には、大袈裟過ぎる程大きなパンダの頭部の彫刻がしつらえてある。
その建物の周りには背の高い南国の木が植えられ、建物の屋上にはカラフルな傘が2本立っていた。
「なんですか？ここは」
舞宵が驚いて尋ねた。楓はむっつりとして答える気配が無いので、雪白が説明する。
「ここでも中くらいなの。社格の高い支局にはこの何倍も大きいところだってあるわ」

ここは現実世界とは違う、神々の為の空間。神社によって造りや雰囲気はまるで違うものなのだが、ここ遠野支部の設計テーマは西洋神殿であった。
「なんだか前に来た時より凄いことになってますね。大変だったでしょう」
雪白はどこか同情を寄せるような口ぶりで楓に話しかけた。
「愛世(ちかしよ)様のご意向でありますので」
楓はいかにも面倒くさそうに、ぶっきらぼうに答えた。
「最近、西洋風の建物は良く見るようになりましたけど、鳥居の中にこれがあると流石にぎょっとしますわね。こういうところは巴も甘いのかしら」
などと話しながら歩いていくと、二階の窓から女が勢いよく手を振って雪白を呼んでいる。
それに気付くと、雪白も手を振り返した。
ふっと姿が消えたかと思うと間もなく、その女は玄関から勢い良く飛び出してきた。

女は楓よりさらに背が高く、豊満な乳をのっさのっさと上下動させて駆け寄ってくる。
「ゆきしろーっ」
満面の笑みで手を振りながらやってくる姿からは威厳も威圧感も感じられないが、なんとなく、この人が巴御前なのだろう、と舞宵は直感した。

前髪はまっすぐに切り整えられ、サラリとしなる絹糸のような黒髪は腰まで伸び、いかにも武家の女といった風貌である。防具も兼ねている金色に輝く髪留めや、朱糸をふんだんに用いた錦(にしき)の剣道着は実に華やかで、並の男では到底乗りこなせぬじゃじゃ馬の気配を纏っていた。そして何より目を引くのは１７０ｃｍを越す長身と零

れ落ちそうな胸の膨らみである。

「巴様が見えられましたので、私は役目に戻らせて頂きます」
楓は浅く会釈して外の方へ立ち去ろうとしたが、巴はその襟首を掴んで引き寄せ、唸るような声で詰問した。
「ちょっっっと待ちなさい。アンタ、何の為に予定空けておけって言われたか理解してないのかなぁ。で、一体なんの役目に戻るところなのかしらぁっ」
「え。えーっと…。多分、その、門番とか、見回りとか、色々あると思われますっ！」
ついさっきまでキリリと引き締まった態度でクールに振舞っていた楓だが、メッキが剥がれるとこんなものである。

「外でブラブラしてたいってしか聞こえないんだけどぉ」
「本日は、雨でありまして、このような日は妖魔の類も活発になったりするのではないかと思いましてっ」
「巡検なら火波（ほなみ）が行ってるって、知らないはず無いわよねぇ」
「あ～、申し送りが行き違っちゃったかなーであります」
「言い訳はいらないの、いい？　あなたの任務は大切なお客様の犬になること。分かった？」
「いっ！？　犬でありますか？」
「ちゃあんと躾けてあげたでしょう？　忘れたって言うなら、もう一度イ・チ・か・ら・可愛がってあげるけど」
楓を後ろから羽交い絞めにしながら、右耳をつねり上げる巴。

「ちゃ。ちゃんと出来ます。ご命令通りにやるでありまうぅぅっ！」
「語尾はワン、ね。あと、ちゃあんと尻尾も振りなさい」
「心の尻尾は振り切れんばかりでありますっ」
「せっかく口が達者なんだから、無口なフリはやめたら？」
「自分も個性が欲しいお年頃なのであります……ワン」

「あらかわいいワンちゃんね。じゃあ、先に行ってお茶くらい用意しておいて頂戴」
「わんっ」
「返事はハイでしょっ！？　私を馬鹿にしてるのかしら？」
「うぅ……」
楓はトボトボと建物の中へと先に歩いていった。

これがあの、女武者の巴御前であろうか。母から聞いていたのとはまるで違う様子に、舞宵は絶句するばかりであった。
「もう、生き生きしちゃって。うらやましいわ」
雪白が口も押さえず、ケラケラと笑う。
「ふふっ。居心地は良い所よ。だから自分らしく居られる。雪白もこっち住みなよ」
「人妻ですから」
「で、こっちはあんたの子？」
「ええ。私はそのつもり」
「つもりって、ははあ、ややこしい感じで、だからうちに来たんでしょ」
「聞いてくれる？」
「もちろん」

そう言ったところで、巴は二人が濡れ鼠になっていることに気付いた。
「で、なんで雨に濡れてるの？」
「ごめんなさい。この子、解現出来なくて。私だけ消えて歩くわけにもいかないでしょう」
「えっ！？　じゃあ、函館から歩いて来たの？　海あるじゃん。船乗って？」
「ねえ。この子をお風呂に入れてあげたいの。出来るかしら」
「あ、ごめん、気付かなくて。あと、乾いた服だよね」

なんの変哲も無い友人同士の会話も、ずっと母と二人きりだった舞宵には、奇異に映った。
自分はこの巴という意地悪で怖い人とやっていけるのだろうかと、不安は大きくなるばかりであった。

「か・え・で～っ！！」
巴が大声で叫ぶと、玄関の戸がわずかに開き、中から楓が怯えるように顔を半分だけ出して、じっとりと湿った視線で巴を見た。
「お茶はいいから、お風呂と着替え～っ！！」
またも大きな声で叫ぶと、小さな声でワン、と返事が聞こえ、楓はパタムと静かに扉を閉ざした。
巴は笑いながらヤレヤレといった感じでお手上げのポーズを取った。
「もう、冗談だったのに。ふふっ。あの子、素直で可愛いでしょ」
「何か、トラウマがあるんじゃないかしら。誰のせい、とは言わないけど」
「強くなるには必要なことよ。ふふっ」

（つまり、私もここに居たらトラウマを…）
大人の会話について行けず、ただ聞いていることしか出来ない舞宵は震えていた。
その震えに気付いた巴は楓を急かす。
「ほらもう、震えちゃってるから～。早くしてね～」
「アオ～ン」
かすかな負け犬の遠吠えが、洋館の壁に張り付き、影を伝って染み込んでいく。
夏だというのに、舞宵の震えは止まらなかった。

建物の中は、外見ほどの能天気さはなく、いたって普通の洋館だった。

一階の左奥の部屋が応接室で、巴は二人を引き連れて中に入った。
大きな革張りの茶色いソファーがふたつ。巨木を切り出したかのような、木目の美しいテーブルもある。
舞宵にとっては、どれもこれも初めて見る物ばかりで、こんな世界もあるのだな、と息を呑んだ。
「まあ、座って座って」
と、巴に勧められはしたが、二人とも濡れたままである。雪白は解現すれば良いだけであるが、舞宵が濡れているのに自分だけ、というわけにもいかない。
「でも、濡れてるから」
「じゃあ、脱ぐ？」
巴の、両手でナニカを揉みしだくようないかがわしい動きに、場が凍りつく。

「ちょっと愛世（ちかしょ）さんに毒されてるんじゃないの？さっきからちょっとおかしいわよ？」
「馴れって怖いよね～」
「友人としては、もうちょっと気を確かに持ってもらいたいわ」
「複雑なのよ。こっちも」
「大変なのは聞いてるけど、あの人のペースに巻き込まれたら駄目よ」
「う～ん」
舞宵は一週間前、雪白に脱がされそうになった事を思い出して、類は友を呼ぶんだな、と密かに納得していた。

愛世というのは、ここ遠野支部の部長のことである。
八戸局長の光世（かがりょ）の双子の妹であるが、強大な力を持つ光世に対して愛世は何の力もとりえも無いうつけ物で、「世に救い難き朔太郎」などと、どこへ行っても嘲笑われる存在であった。

朔とは新月の事である。光り輝く満月のような姉に対する比較で、何一つ輝かない凡骨という嫌みであり、女なのに太郎、と呼ばれるのは、立ち振る舞いに女らしさがまるで無い事への痛烈な皮肉である。

しかも、本人は会話すら成り立たないほどのうつけであるのに、親の七光りで正八位の官位を持ち、いんちきで国家二級の資格を取り、郷社クラスの神社で部長職にあるのだから、妬まれ、悪口を言われるのも無理からぬことであった。

そんな無能で無責任な部長の全権代理として抜擢されたのが巴であった。

金の産出で知られる遠野地域は、活発な地脈が何重にも走り、水脈にも恵まれているパワースポットであるが、西以外の全方面を山に遮られている。その山々には霊山である早池峰山・五葉山が含まれており、地上に噴出した地の力の流れは極めて滞り易く、古来から魑魅魍魎がはびこった。妖怪の巣窟となったこの地方は、人も神も統治に苦しみ続け、長く不安定な情勢であったが、巴が赴任してからは彼女の粉骨砕身の努力によって、良く安定していた。

「同情するわ。大変だものね、ここは」
「あの馬鹿のお守りが無ければ、もっと楽なんだけどさ〜」
「でも、好きなんでしょ」
「まあ、本当に嫌いならもう辞めてるしね」
「私も京都で何度か会ってるんだけど、会う度に初めましてって言われるの。で、そのあとは何言ってるのか分からないんだけど、ハイハイソウデスネって誤魔化してるわ。毎日一緒に居たら、もうやめて！って殴っちゃうかも」
「あたしは初日にガッツリ殴ったけどね」
「でも、あの人相手だと、喧嘩にもならないでしょ」
「まあね〜。親にもぶたれた事ないのに〜って泣かれて、萎えたわ

よ」
「そういう繊細なタイプって、和歌とか得意なんじゃない？」
「あ～、和歌って言えばこないだ凄いのを詠んで、教育係の籐七郎さんが思わずぎっくり腰になったんだって。なんだったかな～。なんか芋虫が野菜に乗って宇宙まで飛んでくっていう感じので、しかも本人は恋歌だって言い張ってるの」
「なんだか凄く楽しそう。聞いてみたかったわ」
「ふふっ。聞いたあとに殴りたくなるわよ」
「巴にしか殴られた事ないのに～とかいって泣いちゃうかしら」
「でもあの馬鹿を殴っていいのは私だけだからね」
「はいはい。ごちそうさま」

女という生き物は、のろけ話と悪口を言っている間は、しゃべり疲れる事などないものである。
会話に入り込めない舞宵は、孤独を噛み締めていた。

「巴様。お風呂が沸いたワン」
扉の向こうから哀れな子犬の声が響く。
「楓。まず部屋に入りなさい」
「はっ、失礼しますワン」
おずおずと扉をあけて、楓はまた顔だけを出して巴に何か言いたげな、じっとりとした視線を送った。
「またこの子はすぐいじけて～。自慢の火がしけるわよ。シャキッとしなって」
「わふ…」
「もう本当にナメクジみたいにジメジメして。じゃあもう語尾はワンじゃなくてナメにするわよ？」
「わかりましたナメ…」
従順すぎる楓に巴が呆れる。
「……。もうちょっと鍛えないと駄目みたいね。まあとりあえず、

あれ？　この子名前なんだっけ？」
「り、リムセです。」
「あら、可愛い声ね。じゃあ、リムセちゃんは楓についていって、お風呂に入ってきてくれるかな？」
「はい。お邪魔します」
　舞宵と楓が退室すると、雪白は一週間ぶりに解現し、ソファに腰掛けた。
「で、何者なの？あの子。普通じゃない感じだけど」
「これは私達だけの秘密よ。約束できる？」
「てことは相当ね。覚悟して聞かせてもらうわ」
「あの子は…」
そう言いかけた時、雪白は部屋の外に誰かの気配を感じた。

昼行灯を湯に浸けて

「おい、巴〜。風呂入ろうぜ」
何の前触れもなく開け放たれる扉。その向こうには銀に輝く西洋甲冑を着た女性が立っていた。
クルリクルリと毛先が跳ねた短髪の頭をくしゃくしゃと掻き毟り部屋を見回すと、小鼻をヒクヒクと動かし始めた。
これが噂の愛世である。二重まぶたの大きな目をクリクリとさせて、少し考えたあと、今度は鼻をつまみ、おかしな声で挨拶をした。
「ああ、誰か来てたんだね。でもまだおやつの時間じゃないよ？」
「初めまして。巴さんの友人で雪白と申します」
「どうも初めまして。巴の代理の愛世です」
「愛世様、今は大切な話をしておりますので、外で火波（ほなみ）とでも遊んでいてください」
巴は愛世の銀色の甲冑を押して外に出そうとする。
「でも僕も晩御飯が何か知りたいよ〜。ずるいよ〜。二人だけで決めるなんて〜」
「どうせまた里でフラフラ遊んでいたのでしょうが、私達には食事は必要ありません。人間とは違うのだと何度言ったらお分かりになるのでしょう」
「神は人、人は神だよ」
「！？」
急に真面目な顔で哲学めいた事を言いだすものだから、巴は意表を衝かれて黙ってしまう。
「でも巴って人間か神か、どっちかって言ったら、小姑っぽいよね」
次の瞬間、ブンっという風切り音と共に愛世は廊下に吹っ飛んだ。
「まったく、毎日こんな調子なんだから！時々本当に殴ってやろうかと思うわ」

巴の右フック、右フック、左ストレート、右アッパーの連続技がヒュンヒュンと空を切る。
「今のは、ノーカウントなのね。」
ひきつり気味に雪白が笑うと、巴は腕組みしてバツの悪そうな顔をした。
「さっきのは紙一重の極意って言って、相手にはギリギリで触れていないからノーカンなの」
「どうして楓さんがあんな風なのか、分かった気がするわ…」

「――で、さっきの話の続きだけど。あの子がどこの誰なのか」
「ごめんなさい。それはちょっと待って頂戴。名前はね、舞宵っていうのよ。とりあえず、早池峰の北側の辺りで祀られていたみたいなの」
「あ、じゃあうちの近くなんじゃない。でもなんで函館に？」
「正確には恐山の近くで、母親と魔堕ちしてたのよ」
「それで、母親は？」
「あの子の首にぶら下がってる小石よ。四重に封印してようやく瘴気が漏れて来なくなったの。かなりの穢れだったわ」
「雪白がやったってこと？」
「ええ」
「それでよく子供が懐いたわね」
「あの子なりに、色々考えているんだと思う。私にはまだ分からない事だらけよ。痛々しいくらい相手に気を使う子よ」
「そっか。じゃあ、わざわざ遠野まで来たのは？」
「う～ん。ごめんなさい。単刀直入に言うと、匿ってあげて欲しいのよ」
「本っ当に単刀直入ね。断りにくいわ」
「駄目なら函館に連れて帰るけど、こっちにも色々あるのよ」
「まず、その色々ってのがどのくらい色々なのか聞かせて。即答できる話じゃないから」

「うん。ごめんなさいね」

それから雪白は、舞宵の母が山姥となって、多くの人を殺してしまった事、八戸支局では死んだ新田広門をはじめ、多くの被害を出し、舞宵の存在を知れば必ず罰するだろうと言う事。そして舞宵が母を想い、自らを犠牲にして救おうとした事、そんな舞宵を母は嗜めて、自ら封印を受け入れた事などを話した。

始めは飄々としていた巴も、話を聞くうちに沈痛な面持ちに変わっていった。

二人が話し込んでいる間、愛世は風呂に来ていた。

「楓も入ったらいいじゃないか。僕一人じゃ何秒息が止められたか、タイムが計れないし」

「残念ですが、私は火の加減をしなければなりませんので。尚、現在浴場には客人のリムセ殿がおりますので入浴はご遠慮ください」

「じゃあ、三人で入ろうか」

愛世は楓の右手の小指を握り、グイグイと引っ張っていった。

「折れますう。折れますって～」

浴室に騒々しい二人が入ってきたので、舞宵は慌てて身を潜め顎まで湯に浸かった。

なんの遠慮も恥じらいも無く、愛世は全てを曝け出したままザブザブと湯の中を歩き、舞宵の隣に座った。

「ああ、さっきすれ違った君か。リムセちゃんだね。僕は愛世だよ。よろしくね」

「はあ…。よろしくお願いします」

昨日雪白が言っていた通りの無頓着な人だと、無防備な裸を見て思った。

「ほらほら～。楓も早くおいでよ～。もう何年もお風呂入ってないよね～」

「い、嫌な言い方しないでください！　っていうか、私達はお風呂とか必要ないじゃないですか！」
「じゃあ、なんでここにお風呂があるんだろうね～。楓は知ってる？」
「さあ」
「ほらほら。楓はいつもそうやって面倒くさがって答えないんだよ～。意地悪だよね～。正解は、解現できない妖怪の部下が多いから、食堂と浴室を作った。でした～」
「知ってるなら聞くなよ」
　思わず楓は小さな声で呟いた。
「そうそう、語尾にナメってつけなくて良いのかナメ～。巴に言いつけるナメよ～」
「きっ、聞こえてたんでありますか？」
「取りあえず、示現して風呂な。話はそれからだから」
　急にガラの悪い態度で脅しに掛かる愛世に、楓も仕方なく長タオルを厳重に体に巻きつけ湯船に浸かった。
「楓のせいで、リムセちゃんと何にも話せてないよ。全く。で、リムセちゃんて雪白さんの子供？」
「い、いえっ。まだなんとも」
　雪白に子供が出来れば巴が騒がない筈はないが、そういう話は聞いた事が無く、実子でないことは愛世の予測の範囲内であった。そして、今の舞宵の答えで雪白が養子について考えているのだと気付いた。つまりそれが遠野を訪れた目的である事も。
「どおりで。雪白さんはあんなに肌が白いのに、君は結構浅黒いものね。顔も似てないし。」
「愛世様。そういう言い方は」
　楓が愛世の無礼を嗜める。
「僕は好きだよ。夏の野うさぎみたいじゃないか。遠野といえばウサギ狩りだしね」
　そういって愛世は舞宵の少年のような胸の辺りをジロジロと眺め

た。
いくら女同士とはいえ、恥ずかしいものは恥ずかしい。舞宵はたまらず背を向ける。
愛世の『嗜好』を知っている楓は、一層低い声で警告を発した。
「ウサギを狩る前に、巴様に狩られると思われますが」
「僕だってたまには狩られる側じゃなくて、追いかける側に回りたいんだよ。リムセちゃんにウサギの耳をつけて追いかけっこしたら楽しそうだと思わないかい？」
「そ、それは…」
楓は頬を緩ませて、否定しなかった。
「冗談だよ。僕が気になったのはその首飾り…って言うのかな？その石の方。もっと綺麗な石なら、その辺にいくらでもあるのになって思ってさ」
「これは、母との約束の証です。私にはとても大切な石なのです」
愛世は、なるほど、という表情を微かに浮かべつつ、質問を次に進めた。
「そう。ならば大切にしないとね。で、ここには何しに来たのかな。遊びに来たの？」
それについては、雪白が巴に頼んでみる、と言っていたし、自分は勝手に口を挟まない方が良いのだろう、と思っていた舞宵だが、逆に自分が何もせず全てを人任せにするのも無責任だと感じていたのだった。
「あの、愛世様！」
舞宵は勢い良く愛世の方へ向きなおすと、唐突に切り出した。
「突然で申し訳ありません。どうか聞いて頂きたいお願いが御座います」
昨夜、雪白は愛世を無頓着な人、とは言ったが、無能でお馬鹿だと言う事を舞宵に伝えていなかった。その為、舞宵は愛世に対して、さっき見た巴よりまとも、という印象を持った。

「なんだか訳ありみたいだし、そのために遠野まで来たんだよね。ちゃんと聞くよ」
さっきの巴との馬鹿げたやり取りとはうって変わって、理知的な受け答えである。
舞宵は愛世に直談判した方が賢明だろうと、思いをまっすぐにぶつけた。
「私をここで働かせて欲しいのです」
「うん、でも何で雪白さんのところじゃ駄目なのかな？」
真面目に対応する様子を見て、楓は愛世が舞宵を気に入っているのだな、と感じた。
「自慢じゃないが、愛世様が真面目に人の話を聞くのは珍しい。せっかくだから、遠慮なく相談したほうがいい。愛世様は乗り気だ」
ぱあっと舞宵の表情が明るくなった。

「おい、巴～。なんで風呂に来なかったんだよ～」
またしても無遠慮に応接室の扉を開け放ったのは愛世であった。反射的に巴が縮地の術で間合いを詰め、掌底突きを放つが、その右手は楓の両手で受け止められてしまう。
「後ろにお客様が」
愛世の後ろには風呂上がりの舞宵がいた。
「毎日サボってばかりにしては、いい反応じゃない」
「人目を避けて努力しているのであります。ナメ」
「明日からは私の目の前で努力してね」
巴は怒るかと思いきや上機嫌で楓の頭を撫で回した。
「はっ、はぁ…」
楓は顔を真っ赤にしてシュンと下を向いた。
「じゃあ、せっかくだからこの辺を案内してあげてもらえるかな。こっちは色々積もる話があるんだよね～」
「りょっ、了解ナメ」

「もうそれはいいって」
巴は苦笑して、チラリと雪白に視線を流した。
「あ〜、いやいやいやいや、ちょっとその前にさ〜」
愛世が会話に割り込む。
「僕も…」
「駄目です」
言い終わるのを待たず、きっぱりと巴が断る。だが、愛世は怯まなかった。
「楓はもう遊んでていいよ。僕達は作戦会議をするから」
そういって舞宵の手を引いて室内にグイグイ入っていく。
「今、難しい話をするところです。愛世様は外にいてください」
巴は再度退出を勧告するが、愛世は全く気にも留めなかった。
「さぁ、座って」
舞宵の手を引いて、ソファに座らせると、その隣に自分も腰掛けて言った。
「巴。たまには僕も難しい話をしてみようと思うんだ」
巴はハッとした表情を浮かべた。
「じゃあ、楓。案内の役目はとりあえずいいから、二階の客間を準備して」
楓が去ると、巴は閉じた扉に鍵を掛けて三人の方に振り向いた。
「本気ですか？　愛世様」
神妙な表情の巴とは対照的に、愛世は顎を手の甲に乗せて涼しい顔で妖しく笑みを浮かべた。
「巴だって、ずっとそうしたかったんじゃない？親友に隠し事をするのは、辛かったでしょ？」
ああ、この人は本気だ。巴は落ち着かないみぞおちに手を当てて、ふうっと深呼吸した。

ほぐれる糸　結ばれる糸

「ええと、何を話したら良いでしょう？」
ただならぬ空気に、雪白も戸惑う。

「ではまず、このリムセと名乗る子について話をしよう。その次に僕と巴の話をする。そうしよう。ああ、その前に。僕は雪白様には何度も失礼な事をしてきたから、それについてお詫びしなきゃあいけなかったね」
今まで見てきた愛世とは思えぬ話しぶりに雪白は驚いた。
「訳あって、僕はうつけていなければならなかったのです。何度も初対面の挨拶をしてしまって、申し訳ありませんでした」
愛世は席から立って、丁寧に頭を下げた。
「演技…だったのですか。そうとは気付かず、お恥ずかしい対応をしてしまいました。どうぞご容赦ください」
雪白も立ち上がって返礼する。舞宵は何がなにやらさっぱり分からなかったが、雪白に習い、自分も立ち上がり、無言で頭を下げた。

（母を封じた相手の面目にまで気を使うのか。なんと健気な子であろう）
そう感じた巴は、先ほど雪白の言っていた、痛々しいほど気を遣う子、という意味を理解した。
「とまあ、過去の事はこれでおしまい。よろしいですね」
愛世はあっけらかんとして、さっさと席に着き、二人にも着席するよう手を差し出した。
「それで、結論から言うと、僕はリムセちゃんを引き受けるつもりだよ。多分、巴もそう思ってるだろうし」
雪白は驚いた。盗み聞きでもしていたのだろうか。なぜ自分の用件を知っているのか不思議に思っていると、愛世はカラカラと笑っ

た。
「ごめんごめん。ちょっと驚かせようと思って。実はさっき風呂でリムセちゃんに聞いたんだ。でも、リムセちゃんって本名じゃないよね。まずはそこから教えてくれるかな」
人を食ったような態度の愛世に堪りかねて、巴が怒る。
「愛世様。雪白は愛世様より目上です。いくらなんでもその言い方は！」
「それを言ったら、巴だってもっと丁寧に話さないとね。いいじゃないか。巴の親友は僕の親友。駄目かな？」
「私は構いませんよ。その方がスッキリしますし、先々気が楽になりますから」
「さすが。目端の利く人だ。先のことまで考えている。じゃあ、名前は？」
雪白は舞宵に目配せをする。

「私は舞宵と言います。鈴久名の地で祀られていましたが、三百年程前から陸奥の国をさまよい、妖怪となってしまいました。雪白様の情けで、ここまで連れてきて貰いました。どうぞよろしくお願いいたします」
「賢い子じゃないか。舞宵と言ったね。良い挨拶だったよ」
愛世は拍手して労った。
なにやらおかしな雰囲気になってきたな、と愛世を除く三人はそわそわと落ち着かない。

「では次だ。さっきこの子は、自分は罪人の子で、函館に行けば雪白に迷惑が掛かると言った。何の罪を犯したのか。僕には知っておく権利があると思うんだ。」
それならば、と雪白はつい先ほど巴に聞かせた話を、今一度愛世にも話した。

愛世は一通り説明を聞いて、笑みを浮かべた。
「なるほど。大体分かった。それは確かに困った事になるね。特に八戸の者に見つかると厄介だ。雪ちゃんの立場だってまずくなるね。」
「ちょっと！　雪ちゃんってアンタ、いくらなんでもっ。」
「いいのよ巴。ちかちゃん、雪ちゃんでいいじゃない。でも私を呼び捨てに出来るのは夫と巴だけ。それでいいでしょう？」
「なんか違うと思う…。」
しっかりしているようで大雑把な雪白に、巴は憮然として頭を抱えた。

一方で舞宵は、自分の存在が雪白や愛世らに多大な迷惑を掛けているという事実が議題に上がった事で、胸が締め付けられる想いをしていた。田名部を出た時から、ずっと自問自答してきた事であったが、改めて他人の口から聞いて、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
「まあ、妖怪だらけの僕のところなら何とでも誤魔化せるから、それは気にならないんだけどね、問題はどうしてこの子はこれだけの穢れを抱えて、平気な顔をしているのかって事だよ。普通ならとっくに魔堕ちしてる量の穢れだ。それなのに魂に損傷も無く、容姿に変化もないなんて、僕は初めて見たよ。」
雪白は驚いた。自分の見立てでは、舞宵の中に穢れがあるのか無いのかはっきりとは分からなかったのである。
「愛世様には、舞宵の中の穢れが分かるのですか？」
「ちかちゃんでいいってば。まあ、さっき風呂に入っている時に、良く観察したからね。」
そう言われるとなんだか悪寒がして、舞宵は顔を真っ赤にして体を縮めた。
「もしかして、巴にも分かっていたの？」
自分だけが舞宵の穢れの量を把握できなかったのではないか、と

不安になって、珍しく雪白が取り乱した。
「いや、私にはさっぱり。只者じゃない空気を背負った子だな～とは思ったけど」
「そう。では愛世様の目が優れていらっしゃるのね。私には分からなかったのです。普通でない事には気付いていたのですが」
「だから、ちかちゃんでいいってば。なんていうか、目がいいのは僕の数少ないとりえなんだ。それはいいとして、本題を続けるよ？
雪ちゃんはもっと僕に伝えなきゃいけない事があると思うんだ」

「ええ、この子は剣九曜の神紋を開いて、母の穢れを自分の身に移し変える術を成功させました。その際も、相当な穢れを負ったにもかかわらず、自我をなくす事も無く、容貌もあまり変わりませんでした」

「なるほど。それは凄い。にわかには信じがたい話だね。でも僕が聞きたいのはもっと別の事だ。雪ちゃんが本当に親友になってくれるなら、君の口から話して欲しいんだ。鈴久名の辺りで、規格外の力を持った子。僕にはその両親に心当たりがある」

「雪白、まだ何かあるの？」
心配そうに巴が雪白を見つめる。
「恐ろしい人。こんなに頭が良い人だとは思っていなかったわ。おそらく、遠野を上手く統治しているのも、愛世…ちかちゃんの知恵と指示なんでしょう」

「そうよ。私に治世の才覚なんてないもの。ただ言われた通りに振舞うだけ。ごめんね。雪白は親友なのに。ずっと言えなかった」
「いいのよ。私も、知らんぷりして、大変な火種を押し付けようとしていたんだもの。ごめんね。巴」
そう言うと、雪白は愛世の方を向きなおし背筋を伸ばし、一礼し

た後、全てを語りだした。
「ならば愛世様のご厚意に甘え、私の口からお伝えさせて頂きます。この子の、いえ、舞宵の父は源九朗義経殿。母はその妾、静御前にございます。義経殿は頼朝様の怨敵にして、今もその罪を許されず、津軽海峡の底にくくりつけられております。その強力な結界に阻まれ、静殿は三百有余年にわたり、下北の地で祈りを捧げていた由にございます。頼朝様は今や八幡社同盟の旗頭。かの人に舞宵の在る事を知られれば、ただならぬ責めを負うことになりましょう。それでも、私は舞宵と静殿が不憫に思えて、討ち取ることができませんでした。どうかお情けを頂き、舞宵をお守り頂けますよう、この通りお願い致します」

席から降り、ぴたりと額を地につける雪白に、心が張り裂けんばかりの悔しさと申し訳なさを感じた舞宵は、その隣にひれ伏して涙を流して詫びた。
「二人とも、席に戻ってくれるかな。僕の気持ちに変わりは無いよ。舞宵ちゃんは責任をもって預からせて貰う。次は僕の話だ。聞いて貰いたいから、頭を上げて貰えるかな」
愛世に促されても、二人は床に伏せたまま、なかなか席に戻らなかった。
見かねて巴が友の肩を抱き起こす。
愛世は待ちかねて、さっさと話を始めることにした。
「僕の名は愛(いと)しい世と書くけれど、愛しいと書いてかなしいとも読むんだよね。だから僕の本当の名は『かなしょ』と言う。これを逆から読んでごらん。それが、僕が人間だった頃の名前。気が利いているだろう。つまり、僕と舞宵ちゃんは似たもの同士だったというわけだ。ここまで話せば、僕と巴がどんな関係なのかも、雪ちゃんならわかるよね」
四人の話合いはそう長くはかからずに終わった。

雪白と舞宵は二階の部屋に案内され、ベッドの上に腰掛けていた。
「随分と新し物好きなのね。ベッドまであるなんて。私もこういう布団で寝るのは初めてよ」
さっきから雪白があれこれと話しかけているのだが、舞宵は煮え切らない返事をするだけで、表情も曇ったままだった。
また考えすぎて、責任を背負い込んでいるのであろうことは一目瞭然であった。

実は雪白も落ち込んでいた。あまりにも簡単に愛世に舞宵の正体を看破されてしまったからである。脇の甘さを痛感し、深く反省した。もし相手が悪意を持っていたら。もし八幡社同盟に通じる者であったら。間違いなく取り返しのつかない事になっていた。
舞宵を匿うということは大変な爆弾を抱えるに等しい。その自覚があるから余計に舞宵は葛藤しているのだ。
「良かったわ。あと一週間くらい舞宵と一緒にいられるわね」
「本当に、私はここに居て良いのでしょうか。とても…迷惑が掛かります」
「さっき、愛世さんの話を聞いたでしょう？　どの道私達は同志だったのよ。あなたが気に病むことはないわ」
「でも…」
「愛世さんは正体が知られれば八幡社同盟だけではなく、皇王神宮党からも叩かれるの。不来方・八戸・江刺の親族もただでは済まないでしょう。それでも二百年近くも堂々と行政府の支部長をやっているのよ。まして舞宵なんて誰の目に付く訳でもないし、心配は要らないわ」
「はあ…。巧く、できるでしょうか」
「普通にしてれば、大丈夫。ねっ？」
「申し訳、ありません」
「あやまる事なんてないじゃない」
雪白は舞宵を抱きしめて、そのままベッドに倒れこむ。そして耳

元で優しく囁いた。
「ここは面白い人がたくさんいるし、きっと楽しくなるわ。あとは慣れよ」

神様の夜は早い。暗くなれば就寝の時間というのが普通である。
雪白達も早々に寝てしまおうと布団にもぐりこんだところに、巴が訪ねてきた。
「ねえ、雪白。ちょっといいかな」
ノックのあと、扉の向こうから呼びかけた。
「ごめんね舞宵。ちょっと私、行って来るから。多分、愛世様の話だと思うけど」
雪白はそう言って廊下に出て行った。

「取りあえずさ、お風呂でも行かない？　せっかく楓が沸かしてくれたんだし。」
「また楓さんをこき使ったんでしょ。あんまりいじめちゃ駄目よ」
「ふふっ。可愛がってあげてるの。今じゃ私の次に腕が立つわよ。舞宵ちゃんがどこまで追いかけてくるか今から楽しみ」
「怖い怖い」
浴室に入ると、蝋燭の明かりで照らされた浴槽が鈍く輝いていた。
「なんだか新鮮ね。お風呂がある生活なんて、人間みたい」
「そっか、雪白は人間じゃなかったんだもんね。お風呂なんて知らないよね」
「知識としては知ってました。やっぱり、示現して入ったほうが良いのよね？」
「うん。絶対生身ね。それがお風呂ってもんよ」
「じゃあ、女は度胸っ！」
雪白は気合を入れて示現し、素っ裸になる。
その新雪のような純白の肌を見て、巴は息を呑んだ。巴もまた色白であるが、雪白のそれは比べようも無く透き通る銀と言える程で

あった。
　雪白は巴が髪を上げているのに気付き、自分も同じようにその栗色の長い髪をねじって紐で縛り上げた。両腕を上げ、頭の後ろで紐を結んでいる様子を斜め後ろから見つめていた巴は、細い二の腕と重力を感じさせない乳房、そして肉の薄いわき腹に至る芸術的なラインに、女の美の真髄を見たような気がした。
「そっか。痩せてるのもいいかも。ちょっと私も真似してみようかな」
「ありのままがいいのよ。姿形を変えるのって、結構な力を使うし」
　神や妖魔にとって体形や容姿を変えることは難しくない。ただし、変更の大きさに比例して力を使う為、あまり実行する者はいない。

　初めて感じる湯の感触に、雪白は感激した。
「あったかいって、いいわね～」
「ふふっ。雪女が言うと説得力があるような無いような。ま、体が解けて無くて安心したわ」
「雪では出来てません！」
　雪白は少し赤みを帯びた頬をふくれさせて、冗談っぽく怒った。
「一週間も示現しっぱなしで、さすがに疲れたでしょ」
「疲れはいいんだけど、穢れがね。実は結構やられちゃった」
「そんなに強い相手だったの？」
「うん。それもあるし…。人を殺して食べてたみたいなの。聞いただけでも六人。それに、目の前で子供が一人。その殺された人の無念と、残された人の悲しみも背負ってきたから」
「難しいところよね。咎人を生かすってことは、そういうことだもんね」
「巴だったら、どうしてた？」
「私だったら、何も気付かず力任せに滅ぼしてたと思う。多分、舞宵ちゃんまで。だから、良かったんだと思う。英雄の血を絶やすよりは。きっと、もっとたくさんの人を救える神になれるよ。だから、

正しくは無いけど、間違ってもいない。私はそう思う」
「うん…」

そこで二人の会話が途絶えた。
雪白が、その白く長い指をお湯にぱちゃぱちゃと遊ばせて間をつないでいると、巴がようやく口を開いた。
「そういえばごめんね。夕食も出せなくて」
「別に私達には必要ない物よ」
「あれからさ、メニュー増えたんだよ。穢れの溜まらない濃い味シリーズ。でも、津波で供物とか、それどころじゃなくてさ」
「しょうがないわ。次に来る時の楽しみにしておくわ」
「うん。それで、それでなんだけどさ」
「愛世さんの事？」
「はは、やっぱりやめとく。また今度にするわ」
「言っておくけど、私はとっくに気付いてたわよ。あなた達の事は。なんだかんだで彼には甘いもの」
「嘘！！　ボロを出した覚えなんてないし」
「バレバレよ。他の皆ももう気付いてると思うけど」
「嘘！！　やめてよ。それじゃあ明日から皆にどんな顔して挨拶すれば良いわけ？」
「開き直れば良いんじゃない？　いっそ皆の前で宣言しちゃうとか」
「やめて～。今まで積み上げたものが～」
「だから、もうとっくにばれてるから、壊れるものなんて無いの。理解した上で巴に付いて来てるんじゃない。考え過ぎよ。多分」
「はぁ…。多分ってねぇ。まあ、雪白が理解してくれてるなら、もうそれ以上は望まない事にする。っていうか、なんだか最近、傷の嘗め合いばっかりしてるよね。学生時代はもっとこう、夢のある事を語り合っていた気がするんだけど」
「それにしても、おっぱいってお湯に浮かぶのね～。初めて知ったわ」

「ってアンタ、真剣に人の話聞いてた？」
「ぽよ～ん。ぽよ～ん」
雪白はクラゲの様に漂う巴の乳房をツンツンとつついた。
「アンタって、時々すっごく子供よね」
「今日はもう疲れたの。だから、いいでしょ？」
「いいけど、楽しいの？」
「ぽよ～ん」
「そう…楽しいなら…いいわ」

マヨヒガ

翌朝から、雪白は遠野の地の測量に出かけた。
愛世が、舞宵を引き受ける交換条件として、「アマテラス」の模倣システムを要求したからだ。
雪白は技術者として次世代統治システム「アマテラス」の構築に中心的人物として携わっていた。とは言え、アマテラスの規模はあまりに巨大であり、雪白一人で再現出来るようなものでは無い。
愛世もそれについては織り込み済みで、模倣システムは以下の三点に機能を限定したものとなった。

1　アマテラスとの親和性の高いネットワークシステム
2　地脈の力を取り入れ制御する機能
3　2に連動し穢れの浄化を支援するシステム

本来、このような統治支援システムを独自に持つ事は、固く禁じられているのだが、愛世は、隠し事が一つ二つ増えたところで今更、と意にも介さなかった。

アマテラスは黒船が来航し、日本の近代化が始まった頃から開発が始まり、ほんの数年前に稼動したばかりの新しいシステムで、有力派閥の祖神会（おやがみかい）が立ち上げたが、八幡社同盟の台頭により現在は両者が共同で管理運営している。
各神社から人の力（信仰によって生まれる神力）の徴収と、得た神力の再分配が主な利用目的である。
これは中央集権制度の確立を意味する物であり、地方の反発は当然大きかったが、頼朝が中心となって独立主権派を武力で排斥した上で実現した。
また、膨大な神力を蓄積できるタカマガハラという絶対神威保守

領域とも接続されており、高位の神はこのアマテラスを通じて、タカマガハラ内部に自身の複製精神体をリアルタイムで上書きし続けることが可能となっている。

さらに、各神社に設置された子機が神造霊脈を通じてアマテラスと接続され、神力の授受、音声通話データの授受が可能となっており、今後はさらに様々な機能が追加される予定である。

アマテラス構想は神の世界に衝撃を起こし、皇王神宮党や日本稲荷連合らの有力派閥も同様のシステムを鋭意開発中という噂が漏れ聞こえていた。

雪白は一週間かけて遠野界隈の地脈、霊脈、水脈を調査し、このフィールドマップを函館に持ち帰り、システムの構成式を作るという段取りを組み、愛世もこれを了承した。

この合意によって、愛世と雪白の共犯関係が決定した、とも言える。

予定の一週間を過ぎ、雪白は別れを惜しみながら函館へ戻っていった。

舞宵は羽黒という名の忍術に長けたカラス天狗の元に預けられ、隠棲しながらも日々戦闘訓練と勉学に励んだ。

巴が盛んに舞宵の世話を焼く一方、愛世は敢えて関わりを持たないよう気を使っていたようで、あまり顔を合わせる事はなかった。

それから一年ほど経って、ようやく新システムの設計が完了し、その設置の為に雪白は再び遠野に逗留する事となった。

「舞宵！」

雪白が空から舞宵の姿を見つけて大きな声で呼びかけた。

愛世達が拠点とする松崎八幡神社から東に一里ばかり離れた貞任山の中に舞宵は居た。
雪白は舞宵の目の前にふわりと着地すると、早速示現して抱きついた。
「雪白様まで巴様みたいなことを」
一年ぶりだというのに舞宵はまるでそっけない。
「葉っぱが凄くて、なかなか見つからなくて、泣いちゃうところだったわ」
「前もって連絡してくれれば、迎えに上がりましたものを」
「あら、巴には言っておいたんだけど」
「では、わざと黙っていたんでしょう。そういう人です」
やはりそっけない。もう少し感動的な再開を期待していただけに、雪白は余計に寂しく思った。
改めて舞宵を見ると、ぐっと成長していた。顔つきも、体つきも一年前とは比べ物にならない程大人になっている。人間と違い、神の姿の成長速度は一定ではない。精神の在りようが、そのまま外見に反映するからである。
その為、三十歳くらいまでは実年齢とあまり変わらず、それ以後はずっとその姿を保つ事になるのが一般的だ。
初めて出会った時、舞宵はすでに三百年を生きながら、見た目は十歳程度であった。それは長い間心を凍らせてきた事に他ならない。
この一年での急激な成長は、遠野の地で幸せに暮らせている事の証左とも言えた。

雪白は舞宵の面倒を見てくれている羽黒と言う老天狗に丁寧に挨拶したのち、舞宵を連れて巴の元へ向かった。
松崎八幡宮の鳥居の前では巴と楓が待っていた。

「遅い」
巴は石段に足を組んで座り、むくれて言った。

「いつから待ってたの？」
別に私は悪くない、と言いたげな態度で雪白が訊くが、巴は答えなかった。
「先に舞宵ちゃんの方に行ってたんだぁ。別にいいけどぉ」
巴は、真っ先に自分のところへ来て欲しかったのだろう。すっかり臍を曲げた様子で組んだ足をブラブラと揺らして口を尖らせて見せた。
「もう。巴って時々子供っぽいんだから」
雪白はそう言って手を差し伸べた。
二人は長い付き合いである。雪白は舞宵を一番大切にしているんだよ、と言う事を、それとなく舞宵に分からせる為の演技なのだと、雪白はすぐに察していた。

「まずは愛世さんに報告と、これからの段取りね。凄い量だから、びっくりしないでね」
「私にも手伝える事はありますか？」
やっと皆の役に立てるかも知れない、と舞宵は目を輝かせて尋ねた。
「山ほど。多分一ヶ月は掛かると思うわ。覚悟してね」
「はいっ」
良い返事だった。一年前、溜息ばかりついて、塞ぎこんでいた頃とはまるで別人である。
一方、楓は最後まで無言を貫いた自分に酔っていたが、心のどこかで虚しい様な、さびしいような感情を持ち始めていた。

雪白らは支部庁舎内で愛世と合流すると、楓に留守を任せ、南に一里ほど移動し、伊豆三山社という小さな神社を訪れた。
「僕はここに新たな拠点を作ろうと思うんだ。もちろん、雪ちゃんが作ってくれる秘密兵器もここに置くつもりだよ」
愛世は両手を広げて宣言した。

「ですが、ここは伊豆権現。頼朝の息がかかっているのではないのですか？」
愛世と巴がこんな基本的な見落としをするはずは無いが、雪白は念のため確認してみた。
「うん。まあ建立に伊豆の修験者が関わったから伊豆の名が付いているけど、遠野三山と瀬織津姫が祭神で、頼朝は無関係なんだ。人払いも済んでいるから、あとは取り掛かるだけ」
「どう？　仕事速いでしょ？　雪白にだけ宿題やらせてたわけじゃないんだからね」
愛世に続いて、巴が誇らしげに言う。

雪白は松崎八幡宮の裏の庁舎に設置するのだと思っていたが、良く考えるとそれでは舞宵が浄化の為に庁舎に入り浸ることになり、舞宵を隠すという目的に反するのだと気付いた。
さらに、愛世はこの先起こるであろう国と国との戦争によって政治が乱れ、神界の派閥抗争が激化すると予想していた。
愛世ら中央神道行政府社員はいわば役人の立場であり、今後の政変によって庁舎が別の神社に移されれば、辞令に従わざるを得ない。そうなれば現在松崎八幡宮に設定されている庁舎は頼朝が牛耳る八幡社同盟に接収される可能性もある。
その為、極秘の新拠点には、派閥に属さない神社を選ぶ必要があった訳である。

「分かりました。では早速取り掛かりましょう。他の神社に気取られないよう、見張りを立てて頂けますか？」
「そうだね。では僕は庁舎に戻って手配するよ。巴はこのまま雪ちゃんの手伝い。舞宵は羽黒を庁舎に呼んで来てくれるかな。そしたら朱鞠（しゅまり）と楓もこっちに手伝わせるから、鍛えてやって貰えるかな」
指示を受けるや否や、舞宵は東の貞任山へ駆けていく。

「はっやいわね～。あれじゃ人間じゃないのがばれちゃうわ」
「一年で、見違えましたね。本当にありがとう。巴」
「ううん。結局私も羽黒の爺さんに丸投げしたようなもんだから、心苦しいのよ。あの子からすれば、たらい回しってことじゃない？」
「それでもあの子は感謝してると思う。皆の役に立ちたくて一生懸命だもの。それにひきかえ、私のことはどう思ってるんだろうって。来る前も不安だったけど、会ってみたら余計不安になっちゃった」
「甘えないからね。あの子は。でも。そういう性格なんだから、雪白は考えすぎない方がいいわ」
「うん。分かってはいるの。でもそれにしても他人行儀だったから」
雪白の表情があまりに暗いので、愛世が助け舟をだす。
「穢れが溜まっているから、感情が乏しいのかも知れないね。ここなら浄化に最適な立地条件だし、時間が解決するところもあるんじゃないかな」
「そうですね。気を使いすぎても逆効果ですし。あんまり一喜一憂しない事にします」
「それが良いと思うよ。じゃ、僕は行くね。あとはよろしく」
「あ、その前に。名前を決めませんか」
雪白が呼び止める。
「ああ、そうだそうだ。僕も名前がないと不便だなって思ってたんだった」
「アマテラス丙型、とか？」
「うん、秘密兵器っぽいね。でも、誰かに聞かれたらそれだけで正体がばれるよね」
「例えばの話よ」
巴も愛世も、呼称の必要性は考えていたが、具体的にはまだ先の話と思っていた。
「あの、私、『マヨヒガ』にしたいと思っていたんです」
愛世も巴も目を丸くして雪白を見つめる。
マヨヒガ、と言えば東北地方に広く伝わっている民話の中に登場

する、いわば桃源郷の中の住居の事である。遠野にも『まよいが』の伝承はあり、巴も愛世もその言葉は良く知っていた。
「なるほどね。マヨイの家、か。私は気に入った。それがいい」
巴は二つ返事で賛成した。愛世も異論は無かった。
「でも、それだと舞宵ちゃんは私の子供になっちゃうかも」
巴が冗談めかして言った。
「私はそれでも良いと思う。一緒に暮らせない私には、絆が作れないもの」
思いがけない弱音に、巴は慌てて弁解する。
「馬鹿、何言ってんのよ。今からそんな弱気でどうすんの？　冗談だからね」
「ううん。本気よ。きっとあの子は私に義理立てして、受けられる愛情も辞退しちゃうもの。今からはっきりさせていたほうが良いと思うの」
面倒な話を長々として切り上げない雪白に、愛世は内心苛立っていた。
「悪いけど、僕はもう行くよ。結論ははっきりしてる。血も繋がらない僕達は舞宵の親にはなれない。広い意味での家族、それでいいじゃないか。じゃあね」
愛世は冷たく言い放つと、ヒョイヒョイっとイナゴのように跳ねて帰っていった。

「私は、なれると思うよ。あの人はひねくれてるのよ。ほら、桜前尼様と血が繋がっているのに魂が繋がってないから。変に意地を張ってるだけ」
「いいのよ。私が母親って言葉の響きにこだわり過ぎているの。それこそ身勝手よね」
「もうちょっと気持ちを表に出してくれる子なら、助かるんだけどさ」
そう言って、巴は力なく笑った。

「巴。舞宵の事、どうかお願いね。私の分まで、抱きしめてあげてね」
「まかせて。私はあの子、好きだもの。雪白と良く似てるから」
「えっ！？」
「根暗で気を使いすぎるところが、そっくりよ」
巴は力強く友の背を叩いた。

それから一ヶ月程してマヨヒガは完成した。
地脈の力を吸い出す力は、一般に普及している風水盤式の１５倍の性能を持ち、この力を以って舞宵の浄化が進められたが、浄化システムは想定していた性能を発揮できず、解現出来るまで回復するのに２０年、完全に穢れが祓われるのに６０年を要した。

浄化が完了すると、舞宵は出自をカラス天狗の羽黒の一族と称し、雪白の養女となった。
そして母・雪白の推薦で神学舎に進み、順調に地方３種と国家３種の資格を取得。
中央神道行政府の京都本庁に就職した。
実力にものを言わせてエリートの道を進むと思われたが、出自の卑しさと、愛想の無さが上役に嫌われて、重要な仕事は任されることがなく不遇をかこっていた。

そんな中、雪白に待望の実子が誕生し、鈴白と名付けられたその子はわずか１２歳で国家３級の資格を取得してしまう。
国家３級の合格者の平均年齢は９０歳であり、１２歳で難関を突破した鈴白は、３００年に一人の天才と呼ばれ、一躍注目を集める存在となった。
特に方術制御においては、かの雪白をも凌ぐ素養を持つとあって、アマテラスへの介入権限を増したい中央神道行政府では、特別待遇を以て積極的に勧誘を行い、鈴白もいったんはこれを快諾していた。

しかし、鈴白は突如として内定を反故にして、日本稲荷連合へ就職してしまう。しかもその待遇が、ボロボロの無社格神社で月給５万５千合、という、行政府の提示した２５万合を大きく下回る薄給であった。

完全に面目を潰された中央神道本庁は鈴白を要注意観察者に指定し、監視者として舞宵を派遣したのである。

稲荷神・鈴白

舞宵は客将という立場で千葉県の東安房神明神社に身を寄せながら、鈴白の北山稲荷に通う毎日を過ごしていた。

海から離れ、急峻な山の中腹のわずかな平地に建てられた北山稲荷は、地図からも姿を消した小さな神社で、もう何十年も前から宮司もなく、人々から忘れ去られた存在である。

鈴白は4年前からここに配属されているが、その4年間でこの地を訪れたのは探検ごっこをしていた子供二人だけで、上司からの指示もいっさい無く、ただただ暇を持て余していた。

当然、暇人を監視する舞宵も暇を持て余していた。

時は2007年の7月。

本来梅雨真っ盛りの時期だが、雨の気配は無く、この日も良く晴れていた。それでも風は涼しくて、過ごしやすかった。そんな穏やかな午後に、朽ちかけた古い社の前で言い争う二人の神がいた。

一人は舞宵。

凛々しい眉の下には鋭い眼光を放つ黒き瞳。口元には桜色の紅をさし、引き締まったボディラインはもはや少女のものではない。

着ている服も極めて上質なもので、生地は厚く、黒を基調とした軍服はメイド服のようでいて、男に媚びる程の甘さは無い。

ふわりと広がる膝丈のスカートからは真紅のストッキングに包まれた細い足が伸びている。

もう一人は鈴白だ。

雪白の血を色濃く受け継いだ、その雪のように白い肌の前では、山百合の如きは恥じて咲く事も出来はすまい。後ろで二つに結んだ、腰までそよぐ金色に輝く髪は、太陽を浴びるほどに神々しく煌く。

瞳はペリドットのように淡く透き通る緑。妖魔の血統ゆえの鋭い犬歯が、薄い唇から見え隠れし、まだ少女にもなりきれていない幼い体には似つかわぬ、妖艶な微笑を見せたりもする。
装いは巫女然とするが、千早の襟袖には朱と金の刺繍で幾何学模様が縫い込まれ、緋袴は細身である。

闇の舞宵と光の鈴白と言うべきか、何につけ対照的な二人はまるでそりが合わず、特に鈴白は義姉を疎ましく思っていた。

「今日も猫と遊んだだけで一日を終える気か？」
舞宵が言う。
「フン！　忙しくてとっても偉い舞宵は、自分の神社に戻ったら？」
鈴白はいつのもように嫌みで言い返す。

舞宵も、煙たがられているのは分かっているが、あまりに平和ボケした妹が心配で、口を出さずには居られない。
何しろ、鈴白が要監視対象になった事を心配した雪白が、方々に根回しして、舞宵を監視の役に当てるべく奔走したのを、本庁で目の当たりにしていたのだ。
恩義ある母の想いを察して、自分がもっと妹を守らなくてはいけない、と舞宵は責任を感じていた。
だが、生まれてこの方、平和で安定した日本しか知らない鈴白は、舞宵の危機管理意識を時代錯誤と鼻で笑って憚らなかった。

「いつまでもだらけていないで、鍛錬したらどうだ？」
「だ～か～ら～。ただでさえ給料少ないのに、無駄使いしたくないの。訓練って言っても結構力使うじゃん」
「方術ではなく体術の訓練のことだ。鈴は体術が弱すぎる。万一の時どうするんだ」
「第一、私は稲荷神になったんだもん。魔物と戦う必要ないの。も

うさ～早く帰りなよ～。うるさいし」
「情けない。母上が嘆くぞ」
「嘆かない。むしろ同情してると思うけど。誰かさんが仕送りやめさせたから。ああ、かわいい鈴がひもじい思いをしてるに違いない。って」
「自分で選んだ道だろう。いつまで親の臑をかじる気だ？」
「鈴はまだたったの１６歳だよ？　１６で自活してる奴なんて他にいるの？　舞宵なんか３０年もかかったんでしょ？　馬鹿じゃないの？」
「だが、仕送りを貰ったことは一度もない」
「仕送りできるシステムが無かっただけでしょ」
鈴白はそう言うと、べ～っと舌を出した。

アマテラスを始めとする統治支援システムの進化はめざましく、神のライフスタイルは劇的に近代化していた。
神は人間の社会の科学や文化を貪欲に取り入れ、統治支援システムの機能を日々強化、洗練していった。
神力はやがて通貨としての意味を持ち始め、合という単位まで与えられ、端末からの操作でウェブマネーと同様に扱えるまでになったのである。

食生活も大きく変化した。
食物には穢れが含まれているため、普通はお祓いをした上でほとんど味のない「気」のみしか吸う事ができなかったものが、最近はKフリーと呼ばれる、完全に浄化された仮想食品が出回り、食べる娯楽という文化が神の世界でも生まれたのである。

ピピピピ…

飾り気の無い無機質な呼び出し音が響いた。

舞宵の持つ、アマテラスの携帯端末である。だいぶ普及してきたとは言え、鈴白のような下級の神では手が出ない、非常に高価な代物である。
爛々と目を輝かせ、羨望の視線を送る妹の事などお構いなしに、舞宵は雑にポケットから取り出して構えた。
「はい。舞宵です。どうしたのですか？」
「そうですか。仕方の無い事です」
「了解しました」
３０秒とかからず通話を終え、携帯をしまった。
「ねえ。何の話？　仕事？　っていうか舞宵って全然仕事してないよね」
「また給料が下がるそうだ。こんな閑職に就いていては文句も言えん」
舞宵は、言い訳も根拠も無く一言で給与を減らされてしまう現実に呆れて冷笑を浮かべた。
「だって毎日鈴に説教するだけで、給料出るのがおかしいの。そろそろクビになっちゃうんじゃないの？　そうしたら鈴は自由の身だね」
鈴白はニヒヒ、と意地悪く笑った。
「別の誰かが来るだけだ。私が居なくなってから、後悔すれば良いさ」
クビになる可能性は否定せず、舞宵はふわりとどこかへ飛び立とうとした。
「待って！」
鈴白は舞宵の服の裾を掴んで引き戻す。
「携帯、貸してよ。ちょっとだけ」
「欲しければ出世するんだな」
睨むような目ですがる鈴白を舞宵は冷たく突き放す。
「お母さんと話したいの！」
そう言われると舞宵も少し可哀想に思えて、地面に降りると携帯

を取り出した。
再び登場した携帯を見て鈴白はひまわりのような、満面の笑みを浮かべた。
「あっ母上ですか。いえ、何でも。鈴がわがままを言うので、母上からも嗜めて頂こうかと思ったのです」
舞宵はそう言って携帯を鈴白に差し出した。
受け取った鈴白は、礼も言わずに早足で神社の中に入って行き、そこで暫く楽しそうにひらひらと手を羽ばたかせながら、夢中になって話しをした。

舞宵は焦っていた。このままでは本当に出世の道が絶たれてしまう。
しかし今の役職は、母・雪白が恥を忍んで頭を下げて回り、ようなく手に入れた結果でもある。鈴白が要監視対象から外れない限り、本庁に戻りたいと言うわけにもいかなかった。

「にゃあ～」
ふと見ると、平らで大きな石の上で、二匹の猫が戯れていた。
舞宵は振り返り、鈴白が神社の中で長電話に没頭している様子を確認すると、示現して猫を撫で回した。
一匹は真っ黒くろの黒猫で、いつもおとなしく控えめ。
もう片方は、体が黒で頭だけが三毛模様の、手を出せばすかさずじゃれ付いてくるお転婆さん。
舞宵は左手で寝そべる黒猫を撫で、右手で三毛黒のスパーリングの相手をした。
今の世の太平はまだ長く続くと思われる。いっそこのまま閑職で細々とやっていくのも楽かもしれない、と考え至ることも少なくはなかったが、その度に舞宵は胸元の小さな石をぎゅっと握り締めるのであった。

鈴白の長電話は終わる気配が無い。
参拝客もない、藪と崖に囲われたこの神社で日々孤独に過ごしていた鈴白にとって、母の声は何よりの馳走であったろう。
舞宵は三毛黒を抱えて、自分の顔の高さまで持ち上げると、じっと目を合わせた。
さっきまで盛んに猫パンチを繰り出していた三毛黒はぴたりと大人しくなる。
「これも、叱らないといけないな」
猫から感じられる魔力の気配。誰の仕業かは言わずもがな。
三毛黒を太ももの上に乗せて抱きしめ「憎まれるのは慣れているさ」と吐息混じりに呟いた。
退屈で仕方の無いこの神社に、この二匹の猫が住んでいるのは舞宵と鈴白にとって不幸中の幸いであった。
二人は良く猫を可愛がり、退屈さと寂しさを紛らわした。
だが、鈴白は超えてはいけない一線を越えてしまったのだ。
舞宵は三毛黒を地面に下ろすと、スッと立ち上がり、神社の方を振り向いた。
すると、さっきまで寝そべっていた黒猫は柄にも無く足にまとわりじゃれ付いてくる。
そして、何かを懇願するように見つめて、甘い声で気を引こうとする。
「おまえは優しいな。でも駄目なものは、駄目だ」
穏やかに言うと、黒猫は足から離れ、舞宵に後に続いた。

「鈴。もう時間だ。私は帰る」
「うっ…」
舞宵がズイと手を差し出す。
「わかったわよ。じゃあお母さん、舞宵がうるさいから切るね。また電話するから」
そう言って一つボタンを押し、携帯を自分の懐にしまいこんだ。

「はい。終わったから。バイバイ」
「おもちゃじゃないんだ。鈴。返しなさい。そういう事をするなら次からは貸さないことにする」
強い口調で迫る舞宵に、渋々と携帯を返す。
「冗談が通じない石頭。本気で取るわけないじゃんか」
ぶすけて文句を言うが、舞宵は相手にもせず話題を変えた。
「鈴。猫に何かしただろう。微かに魔力を感じるぞ。」
「おまじないを掛けただけ。怪我とかしないように」
「頭だけにか？」
「……」
「脳を活性化させているだろう」
「……」
図星だった。
鈴白は猫との意思疎通がより高いレベルで出来たならもっと面白くなるだろう、と呪術をかけていた。

「いいか、鈴。猫には猫の。犬には犬の、人間には人間の分相応というものがある。それを捻じ曲げれば、いずれそのしわ寄せがやってくるが、自分だけでなく猫まで不幸になるのは自己責任では言い訳できないぞ。分かっているのか」

「捻じ曲げてないもん。ちゃんと負担がかからないように、外部に術を分離してるから。残念でした。その位言われなくてもわかってるから」
「だからといって因果が無いわけが無いだろう。呪(しゅ)は呪だ！」
舞宵は語気を強め、鈴白の幼稚な言い訳をぴしゃりと跳ね除けた。
鈴白はむくれてそっぽを向いて目を合わせなかった。
その時、細長い境内の向こう側の藪が、風も無く揺れた。
（ああ、もうそんな時間か）
舞宵は解現して姿を隠した。

藪を掻き分けてやってきた少年は、二匹の猫を持ち込んだ張本人で、いつも学校が終わるとまっすぐにこの神社に餌を持ってやってくる。
背は高くも低くも無い。もうずっと散髪もせず、伸ばし放題の髪は肩まで届いていた。
顔の大半はその長い前髪に隠れているが、細く優しい目が、髪の揺れる度に露わとなった。
雨が降ろうと、雪が降ろうと、少年は毎日やってきて、暗くなるまで猫と遊んで帰っていく。そんな習慣がもう2年も続いている。

「あいつ、もう中学3年なんでしょ？　来年からはどうする気なのかな？」
「ここにも高校はあるだろう。そもそも私の知った事ではない」
「友達、居ないんだろうね。舞宵と一緒で」
「鈴だって居ないだろう」
「だって鈴の周りに同じ年代の子がひっとりも居ないんだよ？　しょーがないじゃん。みんな１００とか３００とか年いってるんだもん。もうね、上下関係しか生まれないの。分かる？」
「そういえば、あの猫も捨て猫だったか。そういうのが集まる神社なんじゃないか？　ここは」
「一緒にされたくない」
舞宵と鈴白の会話は、少年には聞こえない。
少年はいつも通りにキャットフードの缶詰を2つ、蓋を開けて並べ、昨日置いて行った空き缶を拾ってリュックに入れた。
いつもなら食べ終わるのをぼんやり待って、それから猫とじゃれ合うのだが、今日は猫がまだ缶詰に顔を突っ込んでいる間に神社のある方へ歩いてきた。
そして、リュックから2つばかり入ったパック入りの稲荷寿司を取り出して、開け放たれた扉の前に置くと、手を合わせて「これからも猫をお願いします」と拝んだ。

この2年で、初めてのことだった。
そしてそれは、鈴白が神となって最初のお供え物でもあった。
嬉しさのあまり、鈴白は少年の眼前で示現して言った。
「ありがとうっ！！これっ、食べていいんだよね？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6382z/

ねころけっと

2012年1月6日09時48分発行